

市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書



平成 5 年度

財団法人 千葉県文化財センター

市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書

平成5年度

財団法人 千葉県文化財センター



卷頭図版 川焼瓦窯跡の軒丸瓦

序

古代の千葉県は、畿内にあった中央政権との深い関係のなかで歴史的に発展してきました。そのため県内には全国的に有名な古墳群・寺院をはじめ、貴重な遺跡が数多く見られます。

また、自然環境にも恵まれていたため、台地上には当時の集落遺跡が多数分布し、古代人の生活の姿を知る上でも重要な地域となっております。

しかしながら、近年、地元産業のめざましい発展に伴い、これらの遺跡の保存にも大きな影響が及んでおり、その保護と活用に向けて基礎資料の整備が緊急の課題となっています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和62年から国の補助事業(「重要遺跡発掘調査」)の一環として、貴重な窯跡のうち、とくに重要なものについて、発掘調査を実施してきました。

今年度は、上総国分寺の瓦を生産した窯跡として有名な市原市川焼瓦窯跡の調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。その結果、窯跡5基と作業場2か所の他、多数の瓦が発見され、これまで不明な点が多かった当時の瓦生産のようすが明らかとなりました。

本書が、県民の皆様の文化財保護への理解と認識を深めるとともに、学術資料として、広く活用されることを願ってやみません。

終りに、文化庁をはじめ、地元市原市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者の皆様の御協力に対して、心から感謝申し上げます。

平成6年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 森 成吉

本文目次

序

目次

例言

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 研究史	3

II 調査の概要

1. 調査の目的と調査区の設定	4
2. 調査経過	5

III 遺構

1. 概観	6
2. 第1トレンチ・第2トレンチ	6
3. 第3トレンチ・第4トレンチ	8
4. 第5トレンチ	8
5. 第6トレンチ	12
6. 第7トレンチ	12

IV 遺物

1. 概観	13
2. 瓦	14

V まとめ

1. 窯跡群の構成と窯構造	38
2. 瓦の系譜と同範関係について	39
3. 供給先への問題提起	39
4. おわりに	40

挿図目次

	頁
第1図 川焼瓦窯跡の位置と周辺の 関連遺跡	2
第2図 調査トレンチ配置図	4
第3図 第1トレンチ・第2トレンチ 実測図	7
第4図 第3トレンチ実測図	8
第5図 第4トレンチ実測図	9
第6図 第5トレンチ実測図	10
第7図 1号窯実測図	11
第8図 第6トレンチ実測図	12
第9図 第7トレンチ実測図	12
第10図 軒丸瓦実測図(1)	15
第11図 軒丸瓦実測図(2)	16
第12図 軒丸瓦実測図(3)	17
第13図 軒丸瓦実測図(4)	18
第14図 軒丸瓦実測図(5)	19
第15図 軒丸瓦実測図(6)	20
第16図 軒平瓦実測図(1)	24
第17図 軒平瓦実測図(2)	25
第18図 丸瓦実測図(1)	26
第19図 丸瓦実測図(2)	27
第20図 平瓦実測図(1)	30
第21図 平瓦実測図(2)	31
第22図 平瓦実測図(3)	32
第23図 隅切り瓦・隅落し平瓦実測図	34
第24図 犁斗瓦実測図(1)	35
第25図 犁斗瓦実測図(2)	36
第26図 平瓦凸面の繩叩き目と凹面の 調整痕	37
折込付図 川焼瓦窯跡地形測量図	

表目次

第1表 軒丸瓦一覧表(1)	21
第2表 軒丸瓦一覧表(2)	22
第3表 軒平瓦一覧表	23

図版目次

巻頭図版 川焼瓦窯跡の軒丸瓦	図版7 軒丸瓦(2)
図版表紙 川焼瓦窯跡航空写真	図版8 軒丸瓦(3)・軒平瓦
図版1 遠景・第1T・第4T	図版9 犁斗瓦(凸面)
図版2 第1T・第2T・第3T・第4T	図版10 犁斗瓦(凹面)
図版3 第5T・1号窯・1号窯灰原・作業場	図版11 隅切り瓦(凸面)
図版4 3号窯・3号窯焚き口・第5T1区	図版12 製作技法(1)
図版5 3号窯・第6T・第7T	図版13 製作技法(2)・焼台・平瓦の大きさ
図版6 軒丸瓦(1)	

例　　言

1. 本書は、千葉県市原市草刈字川焼1,649-1他に所在する、川焼瓦窯跡(遺跡コード219-025)の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている、県内窯業遺跡発掘調査の第2期第2年次事業であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 本事業の対象遺跡名は、川焼台瓦窯跡であった。しかし、千葉県文化財分布地図および千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書などでは、本遺跡の遺跡名を、いずれも川焼瓦窯跡としている。本書でも、本遺跡の遺跡名は川焼瓦窯跡とし、統一しておきたい。
4. 発掘調査は、平成5年10月1日から同年10月29日を行い、整理作業および報告書作成は同年11月1日から同年12月28日まで実施した。
5. 調査および整理作業、報告書作成にあたっては、調査研究部長 高木博彦、事業課長 西山太郎の指導のもとに、主任技師 田形孝一が担当した。
6. 調査の実施にあたっては、市原市教育委員会から多くのご協力をいただいた。また、土地所有者である住宅都市整備公団、伊藤 悟、大野毅一、各位から、所有地の借用をご快諾いただいた。さらに、地元にお住まいの早川 守氏には、調査に際し、種々ご高配をいただいた。各々記して心から謝意を表します。
7. 現地調査から報告書作成にいたるまで、下記の諸機関、諸氏から多くのご指導、ご教示をいただいた。記して心から謝意を表します。(敬称略、順不同)

市原市埋蔵文化財調査センター、史跡上総国分尼寺跡展示館、千葉市文化財調査協会、須田 勉、今泉 潔、近藤 敏、浅利幸一、宮本敬一、田中清美、青沼道文、山下亮介

I はじめに

1. 遺跡の位置と環境

遺跡の所在する千葉県市原市は、千葉県のほぼ中央、東京湾側から房総半島の中央にかけて位置する。市内のほぼ中央を養老川が、北側の千葉市との市境付近には村田川が、いずれも東京湾に流れている。

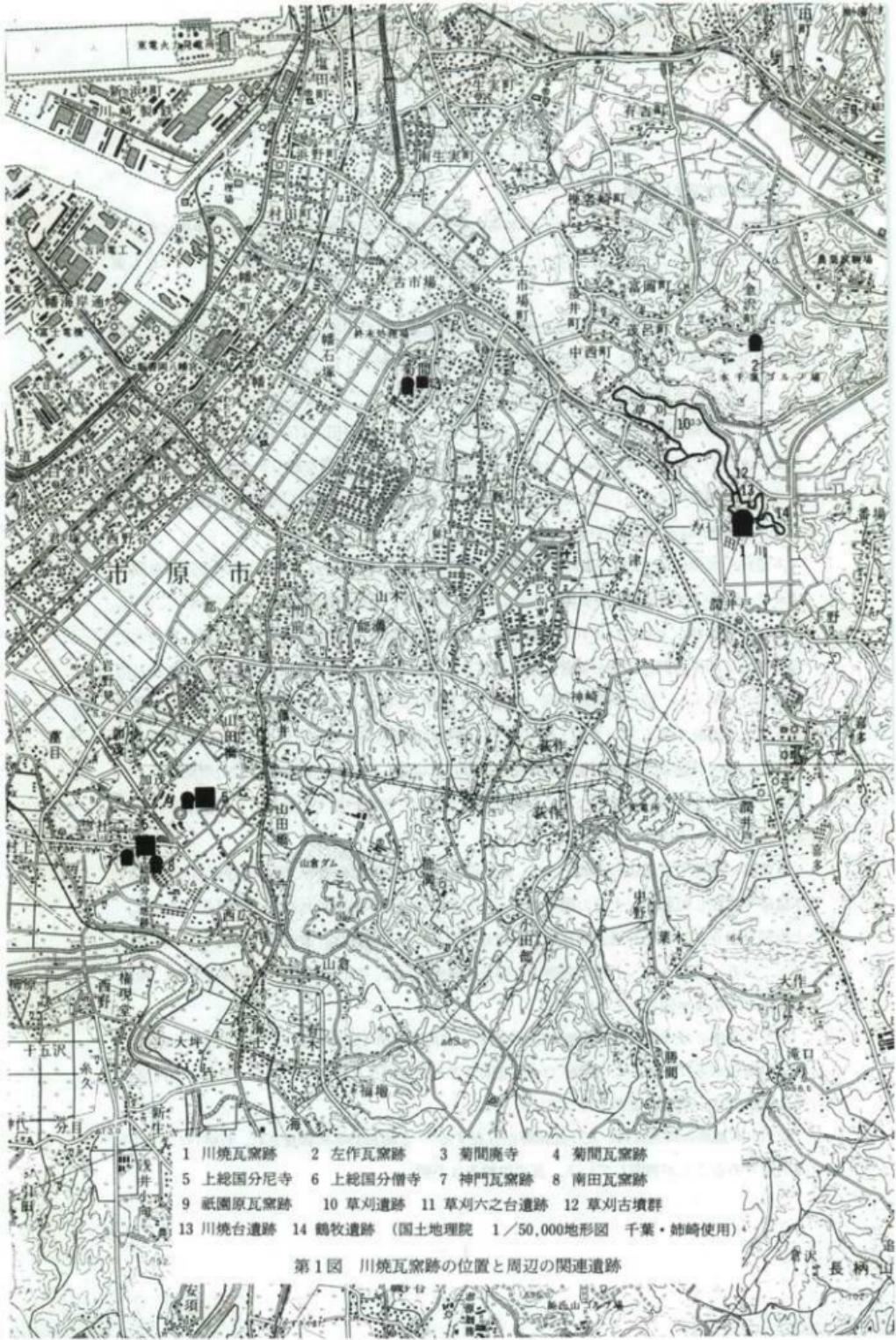
川焼瓦窯跡は、村田川の下流域北岸の、台地斜面部および川沿いの低地面に所在する。付近は標高30m程度の台地が、千葉県特有の複雑な河川の開析をうけて展開する。遺跡周辺の地形も、村田川の旧河道により、台地縁辺部に大きな開析をうけているが、周辺地形との対比から、これらを氾濫源の痕跡としてとらえることができる。なお、村田川対岸には、旧河道の明瞭な氾濫源が認められる。これらのことから、旧村田川は大規模な氾濫を繰りかえしていたことが、現地形でも確認できる^(注1)。本遺跡は、このような開析をうけた台地の、南側斜面部及び斜面部に連なる低地面に立地している。

本遺跡の北側には、村田川沿いに標高30m程度の台地が展開する。台地は河川の複雑な開析により、広範な台地平坦面が展開するところと、狭長な平坦面が展開するところに区分できる。台地上の遺跡は、上記のいずれにも存在する。東京湾側の台地先端から、草刈遺跡、草刈六之台遺跡、草刈古墳群、川焼台遺跡、鶴牧遺跡など、村田川に面する台地平坦面に、ほとんど切れ間なく展開する。特に本遺跡と同一台地上の北側に所在する川焼台遺跡は、本遺跡との関連性を認める遺跡である^(注2)。ただし寺に関する建物の痕跡は見つかっていない。川焼台遺跡で見つかった瓦の詳細は、今後の整理作業をまたなければならないが、調査時点での所見にもとづけば、竪穴住居・掘立柱建物などに、転用されて使った形跡が強く、屋瓦として使用されたことを裏づけるものはない^(注3)。

本遺跡に関連する周辺の遺跡として、養老川中流域の上総国分僧寺、国分尼寺があげられる。本遺跡で生産した瓦が、上記の両寺もしくはどちらかの寺へ供給されたことは明らかである。上総国分僧寺、国分尼寺周辺を含めて、両寺にかかる瓦窯跡は、本遺跡を含めて5か所見つかっている。このうち、上総国分僧寺、国分尼寺周辺には、神門瓦窯跡、祇園原瓦窯跡、南田瓦窯跡の3か所が知られる^(注4)。

また本遺跡のほぼ西、直線距離で6.4km離れ、南河原坂第4遺跡がある^(注5)。水系は本遺跡同様、村田川水系である。この遺跡でも上総国分寺の創建期瓦を生産している。また、南河原坂第4遺跡では、須恵器生産も行っている^(注6)。

なお、本遺跡の周辺には、左作瓦窯跡が存在する^(注7)。昭和33年に調査され、有牀(ロストル)式平窯であることが判明している。瓦の供給先は不明。



- 1 川焼瓦窯跡 2 左作瓦窯跡 3 菊間庵寺 4 菊間瓦窯跡
5 上総国分尼寺 6 上総国分僧寺 7 神門瓦窯跡 8 南田瓦窯跡
9 紙原原瓦窯跡 10 草刈造跡 11 草刈六之台遺跡 12 草刈古墳群
13 川焼台遺跡 14 鶴牧遺跡 (国土地理院 1/50,000地形図 千葉・姉崎使用)

第1図 川焼瓦窯跡の位置と周辺の関連遺跡

2. 研究史

本遺跡の存在については、古くから知られていた。昭和53年、須田 勉及び房総風土記の丘で開催された「房総の古瓦」展によって、はじめて本遺跡の位置づけがなされた^(註1)。また同企画展において表掲資料の公開がおこなわれた。その際、単弁二十四葉蓮華文軒平瓦が上総国分寺と同範である可能性が示唆された。また昭和58年には、県内で瓦が見つかっている遺跡及び瓦の集成がおこなわれている^(註2)。昭和59年には、当千葉県文化財センターによって、本遺跡で見つかった瓦の胎土分析も試みた。本遺跡に関連する瓦の分析としては、祇園原瓦窯跡・南田瓦窯跡の瓦も同時に分析をおこなっている^(註3)。昭和61年に、県内の生産遺跡について、詳細な分布調査がおこなわれ、窯業遺跡として、瓦窯跡の集成をおこなった^(註4)。その後、昭和58年～62年にかけて、本遺跡の北側台地上に立地する川焼台遺跡の調査をおこなった^(註5)。前述のように、台地平坦面の全面的な調査の結果、寺に関わる建物の想定を裏づける構造はなかった。

平成4年度末である平成5年3月に、本遺跡の遺跡範囲を確認する調査がおこなわれた。調査は短期間であり、想定した遺跡範囲のほぼ全域にわたって、調査トレンチを設定した。その成果としては、確認トレンチ2本内に窯体が4か所見つかっている。この時点では、見つかった窯体4か所を、2か所づつ連続する窯体としてとらえ、瓦窯跡2基^(註6)、灰原1か所などを確認した^(註7)。以上、本遺跡に関連するこれまでの研究を概略した。

註1 第1回参考

註2 (財)千葉県文化財センター 「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.9、10、11、12
1983、1984、1985、1986

註3 註2文献。但し、川焼台遺跡については、調査終了後、未整理であり、詳細については不明である。

註4 千葉県教育委員会 「IV 窯業」「千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書」 1986

註5 千葉市教育委員会 「南河原坂窯跡群見学会」資料 1989
また見つかった瓦の一部を、千葉市文化財調査協会のご厚意により実見させていただいた。

註6 大川 清他 「千葉市大金沢町左作瓦窯址」『古代』第33号 1959

註7 ①須田 勉 「上総国分寺の造瓦組織と同範瓦の展開(試論)－特に創建期屋瓦を中心として－」
『史館』第10号 1978

②千葉県立房総風土記の丘 「房総の古瓦」 展示図録No.4 1978

註8 関東古瓦研究会 「第6回 関東古瓦研究会資料 上総・安房編」シンポジウム資料 1983

註9 三辻利一他 「第4章第4節 千葉県内出土須恵器・埴輪・瓦の胎土分析」 『研究紀要』8
(財)千葉県文化財センター 1984

註10 註4文献

註11 註2文献

註12 今回の調査で、平成4年度に見つかった窯体4か所、瓦窯跡2基のうち、少なくとも1基は、見つかった窯体2か所それぞれが別々の窯跡であることが判明した。

註13 未整理。 (財)千葉県文化財センター 「川焼台遺跡(保存地区)」『千葉県文化財センター年報』No.18 1993

II 調査の概要

1. 調査の目的と調査区の設定

今回の調査は、平成4年度に行った調査成果をもとに、窯構造の解明および斜面部最下段(低地面)の灰原分布範囲を確認する目的で調査を実施した。また、地点によっては、新たな窯体を確認する目的で設定したトレンチも存在する。さらに、瓦工房の有無の手がかりとして、斜面最上段のテラス面にトレンチを設定した。

窯構造の解明については、平成4年度に窯体を確認した部分の一つについて、窯体の形態・規模を確認するトレンチを設定した。設定トレンチは第5トレンチ。

低地面での灰原分布範囲の確認は、斜面裾部で見つかった窯に伴う灰原が、低地面に展開することを想定して設定した。また、この位置には農道があり、農道の側溝工事の際に、瓦が見つかっている。このことからも本遺跡の範囲が低地面にのびることは、じゅうぶん予想できた。設定トレンチは、第1トレンチ～第4トレンチ。

また、今回の調査時点で、斜面部上方、第5トレンチよりさらに北東側に、現状で地形が微妙に落ち込んでいる地点を確認した。自然地形としては、明らかに不自然な落ち込みであり、この地点にも窯体が存在する可能性があると判断した。このため、新たな窯体を確認する目的で、この地点に第6トレンチを設定した。

さらに平成4年度に、斜面最上段のテラス部分に設定したトレンチの一つから、瓦が多くみつかっていた。今回、この地点に瓦窯が存在するのか、それ以外の工房なのかを確認する目的でトレンチを設定した。設定トレンチは第7トレンチ。



第2図 調査トレンチ配置図

2. 調査の経過

現地での発掘調査は、平成5年10月1日から開始。ただし事前に、遺跡内の地形測量を実施した。

10月1日。機材などの搬入・設営、調査地点の下草刈りなどの環境整備から開始した。それと並行して低地面での調査トレンチを設定するため、重機（バックホウ）による盛り土除去を開始した。

低地面の発掘は、トレンチ内で出水することが、じゅうぶん予想できる。本地点の旧地表面は水田面であり、その上層の盛り土は、砂による客土が行われていた。このため重機（バックホウ）による盛り土除去も安全性を第一として行った。

はたして、盛り土を除去し、旧水田面まで掘削すると、トレンチ内から水がわきでて、旧水田面と盛り土との境付近で、盛り土である砂を浸食はじめた。そこで、急きょ水中ポンプを使用し、随時、排水作業をしながら、調査を進めることとした。この日は、第3・4トレンチの設定をし、遺構確認面まで掘削をした。瓦の量はさほど多くないものの、灰原の分布範囲の一部と判断できる。

10月5日。第3・4トレンチの図面作成、写真撮影終了。トレンチ内の水抜きした後に、すばやく作業を進める必要があった。また第1・2トレンチ設定。前回同様、盛り土を除去する。第2トレンチ東側は、特に出水量が多く、作業の進捗がきわめて悪い。

10月6日。第1・2トレンチ掘削。旧水田面直下から瓦片が見つかる。瓦の量は、前年度に確認した窯体に近いほど増えていく。

10月7日・8日。雨天。

10月12日。第1・2トレンチの図面作成、写真撮影終了。記録終了後、安全対策のため、低地面で設定したトレンチは、ただちに埋め戻した。

10月13日。窯の構造をつかむ目的の第5トレンチを設定。表土除去を開始する。

10月14日・15日。前年度確認した窯体および最下段の作業場であるテラス部分の表土除去後、遺構検出面まで掘削をした。瓦の量がおびただしい。

10月18日～20日。前年度確認した窯体2か所について、第5トレンチで拡張して掘削をした結果、2か所の窯体は、それぞれ別の窯体であり、第5トレンチ内に、2基の窯が存在することが確実となる。しかし、構造については不明である。瓦の量がきわめて多いため、遺物を取り上げ始める。

10月21日。雨天。

10月22日。第5トレンチの遺物取り上げ。平場および灰原となるテラス部分の写真撮影。第6・7トレンチ設定後、表土除去。第6トレンチの中央付近、および西側で、おびただしい量の瓦が見つかる。想定どおり、窯体の存在をうかがわせる。

10月25日。第5トレンチで見つかった窯体の1基の断ち割りを開始。遺構確認面からかなり深く、当初想定していた登り窯ではない可能性もある。また、第6トレンチでは、窯体が並んで2基見つかる。第7トレンチでは、明確な遺構は確認できなかったものの、瓦片が多く見つかった。いずれも図面作成・写真撮影を行う。

10月26日～28日。第5トレンチで断ち割りをした窯体は、きわめて遺存度の良好な好状（ロストル）式平窯であることが判明。図面作成・写真撮影を行う。第6・7トレンチ、記録終了後、埋め戻し。窯体については、保護したのちに埋め戻した。

10月29日。第5トレンチの最終的な埋め戻し。窯体の断ち割り部分には、土のうをつめ、窯体を保護したのち、埋め戻し。現場機材の撤収をして、すべての作業を終了した。

III 遺構

1. 概観

今回の調査で設定した発掘区のトレンチは、第1トレンチ～第7トレンチの7本である。本報告のトレンチ名称は遺跡西側の低地面から、第1トレンチ～第7トレンチの名称を付けた。ただし、本遺跡については、平成4年度に当文化財センターで確認調査を実施しており、そのときつけたトレンチ番号との重複が考えられる。調査主体が同じ機関であるため、のちのちの混乱などが生じないように、記録図面・写真・遺物などの注記には、平成4年度から継続したトレンチ番号を用いることとした。以下項目の（ ）内で記載した番号は、記録図面・写真・遺物などに記載したトレンチ番号である。

第1トレンチ～第4トレンチは、斜面裾部から南側に相当する低地面に設定したトレンチである。斜面裾部の瓦窯に伴う灰原2か所のほか、土坑3基、溝1条を確認した。

第5トレンチは、窯構造の解明のため設定したトレンチである。設定場所は、遺跡西側の斜面部。この結果、有牀（ロストル）式平窯を含む瓦窯2基、作業場2か所、瓦溜め3か所などの遺構を確認した。

第6・第7トレンチは、遺跡中央付近の斜面上部に設定したトレンチである。第6トレンチでは、今回新たに窯体を2基確認した。第7トレンチでは、明確な遺構は確認しなかったものの、瓦を多く含む遺物包含層を確認した。

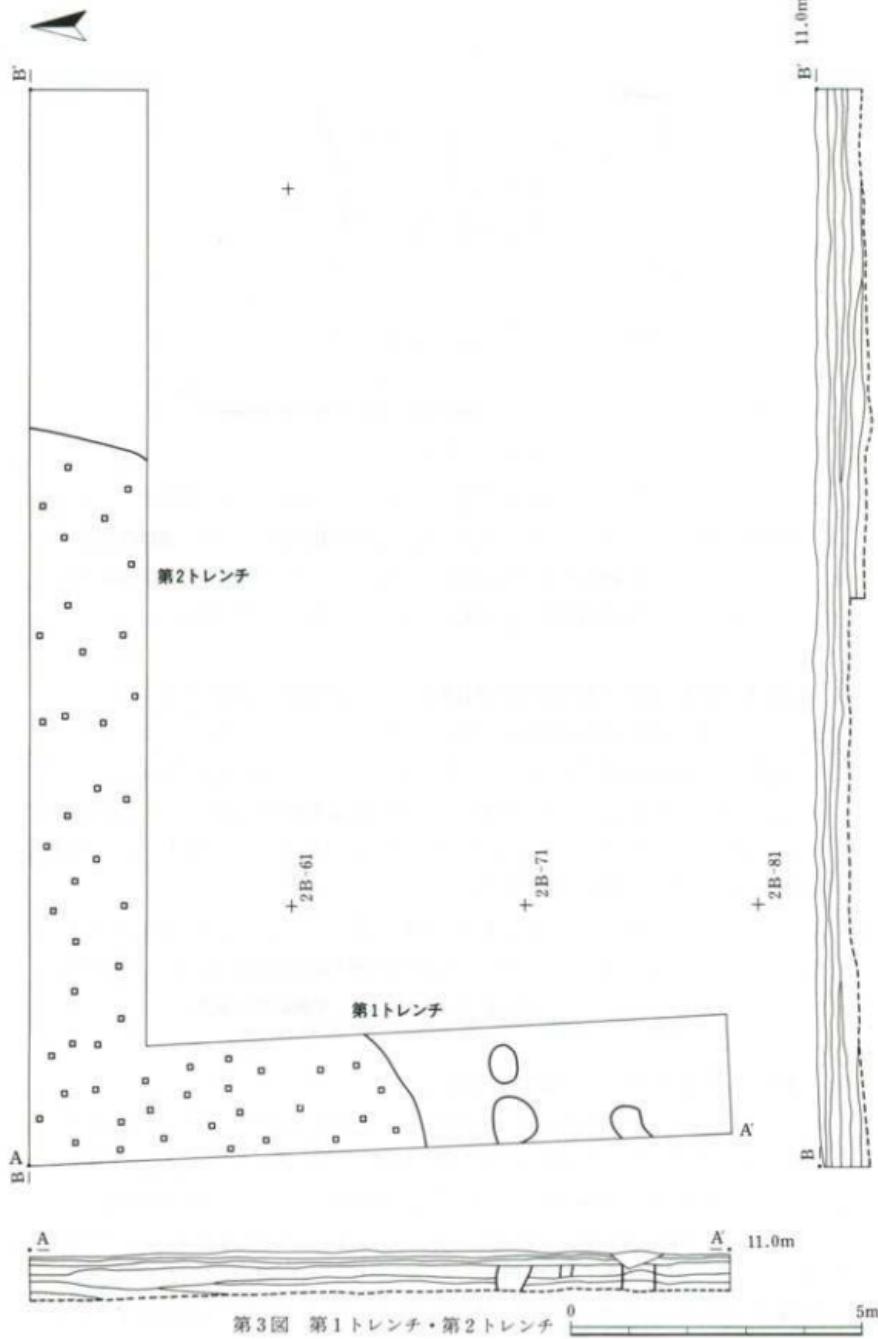
2. 第1トレンチ(14T)・第2トレンチ(15T)（第3図 図版1・2）

第1トレンチが南北トレンチ、第2トレンチは台地斜面に沿う東西トレンチ。このトレンチの北側には、斜面裾部に作業場をもつ瓦窯および灰原が見つかっている。立地は低地面。

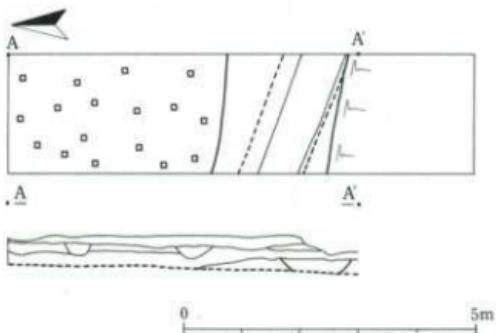
また、低地面のいずれもが、近年まで水田耕作をしていたが、現在は、旧水田面に高さ1.0mほど、客土の山砂により盛り土を行い、畑や、廐車置き場などに利用している。

このため、調査の工程は、トレンチ設定後、山砂の盛り土を除去することから始めた。盛り土の除去には、重機（バックホウ）を使用した。低地面のため、トレンチ内で出水することが予想できたので、本来設定するトレンチの幅・長さより、広めに盛り土を除去し、旧水田面上に予定する幅と長さのトレンチを設定した。つまり、現況面からは段をつけて掘削することとなった。これは、低地面に設定した第1トレンチ～第4トレンチのすべてに共通のことである。

第2トレンチでは、西側から東側に向かって、瓦が分布する遺物包含層を確認した。遺物の見つかる層位は、旧水田面直下からであり、西側に向かうほど量が多くなる。瓦は、細片が多く、ほとんどが平瓦である。



第3図 第1トレンチ・第2トレンチ



第4図 第3トレンチ

第1トレンチは、第2トレンチ西側から連続して設定した。第2トレンチで確認した瓦の分布の南側範囲を確認した。第1トレンチでは、ほかに土坑3基も見つかった。遺構確認面は旧水田面直下であり、瓦を含む遺物包含層を切って掘り込んでいる。時期は奈良時代以降であろう。第1・2トレンチ内の包含層は、斜面裾部の灰原に伴う瓦の包含層と判断した。

3. 第3トレンチ(16T)・第4トレンチ(17T) (第4・5図 図版1・2)

第3トレンチは、遺跡中央部の低地面に設定した南北トレンチ。第4トレンチは、第3トレンチの東側で、斜面裾部に沿うように設定した東西トレンチ。立地は低地面である。

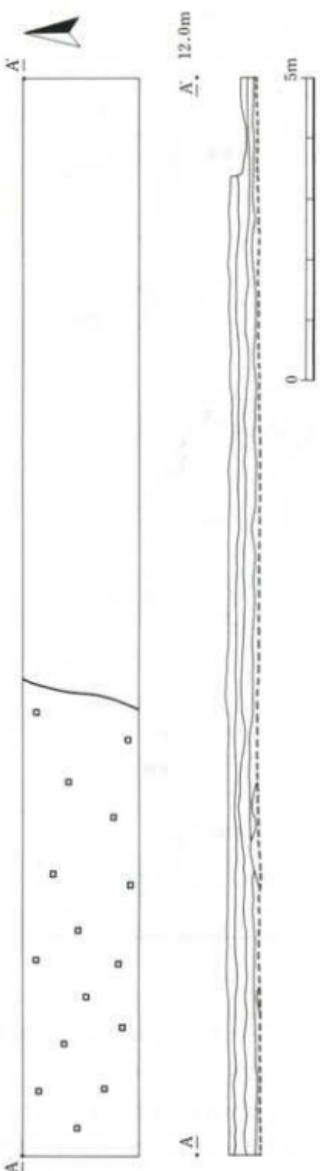
第3トレンチで、北側に瓦の包含層を確認した。量的にはさほど多くはないが、旧水田面直下から見つかった。また、本トレンチ中央付近で、溝1条が見つかった。瓦が見つかる包含層を切っている。時期は奈良時代以降であろう。

第4トレンチでは、西側で、瓦を含む遺物包含層を確認した。ただし、瓦の量は、第1・2トレンチと比較すると、さほど多くはない。総量で整理箱(54cm×33cm×7.5cm)1箱程度である。第3・4トレンチにより、遺跡中央部に展開する灰原の南側範囲を確認した。

4. 第5トレンチ(18T) (第6図 図版3~5)

第5トレンチは、今回の調査で、最大の目的である「窯構造の解明」をするために設定したものである。遺跡西側で、前年度確認した2か所の窯体を、取り囲むように、トレンチ幅を設定した。また斜面裾部に、窯体に伴う作業場(平場)となるテラスを、現地形でも確認した。このため、テラス部分と窯の焼き口をつかむため、テラス部分を含めた長さでトレンチを設定した。そして表土除去ののち、瓦窯の平面プランをつかむことから開始した。

その結果、2か所の窯体は、それぞれ1基ずつの瓦窯となることが明らかとなった。そこで、



第5図 第4トレンチ

下段を1号窯、上段を3号窯とした。なお2号窯は、前年度の確認調査の際、本地点の東側で窯体を確認しており、そちらを2号窯とよんでいる。

1号窯 (第7図 図版3)

遺構実測図中の瓦のうち、波状は凸面の繩叩き目、格子は、凹面の布目圧痕をあらわす。

斜面裾部から、主軸方向を北北東に向か築造する、有牀（ロストル）式平窯である。遺構確認面での規模は、幅1.3m～2.25m、焚き口部が不明であるため、長さ3.78m以上。焚き口部から燃焼室は、羽子板状に開く形状であると考えられる。

焚き口部は、斜面裾部の作業場であろうテラス面のなかに入り込むように構築している。

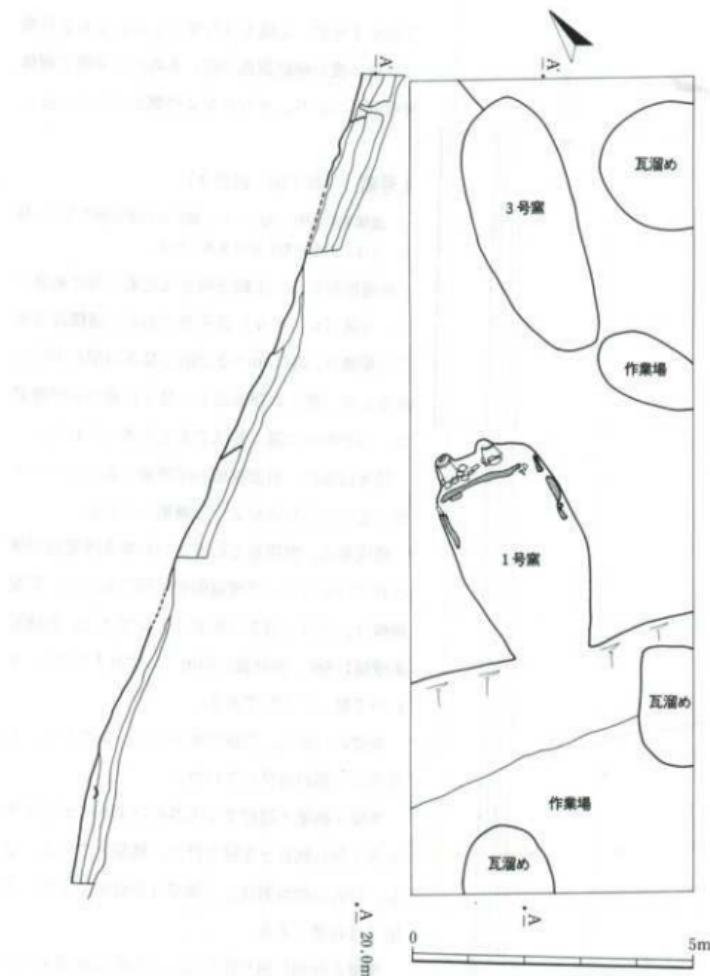
焼成室は、燃焼室との境、いわゆる障壁部が壊されているため、燃焼室側が不明であるが、平面規模は、ほぼ全容をつかむことができた。燃焼室奥壁幅1.8m、側壁長1.75m（いずれも内法）。きわめて整った方形である。

奥壁の一部は、内側にオーバーハングして、天井部の一部が遺存していた。

奥壁・側壁・遺存する天井のいずれもが、ساسを多く含む粘質土を貼り付け、構築している。なお、付近の地盤層は、上層では粘質土であり、下層では砂層である。

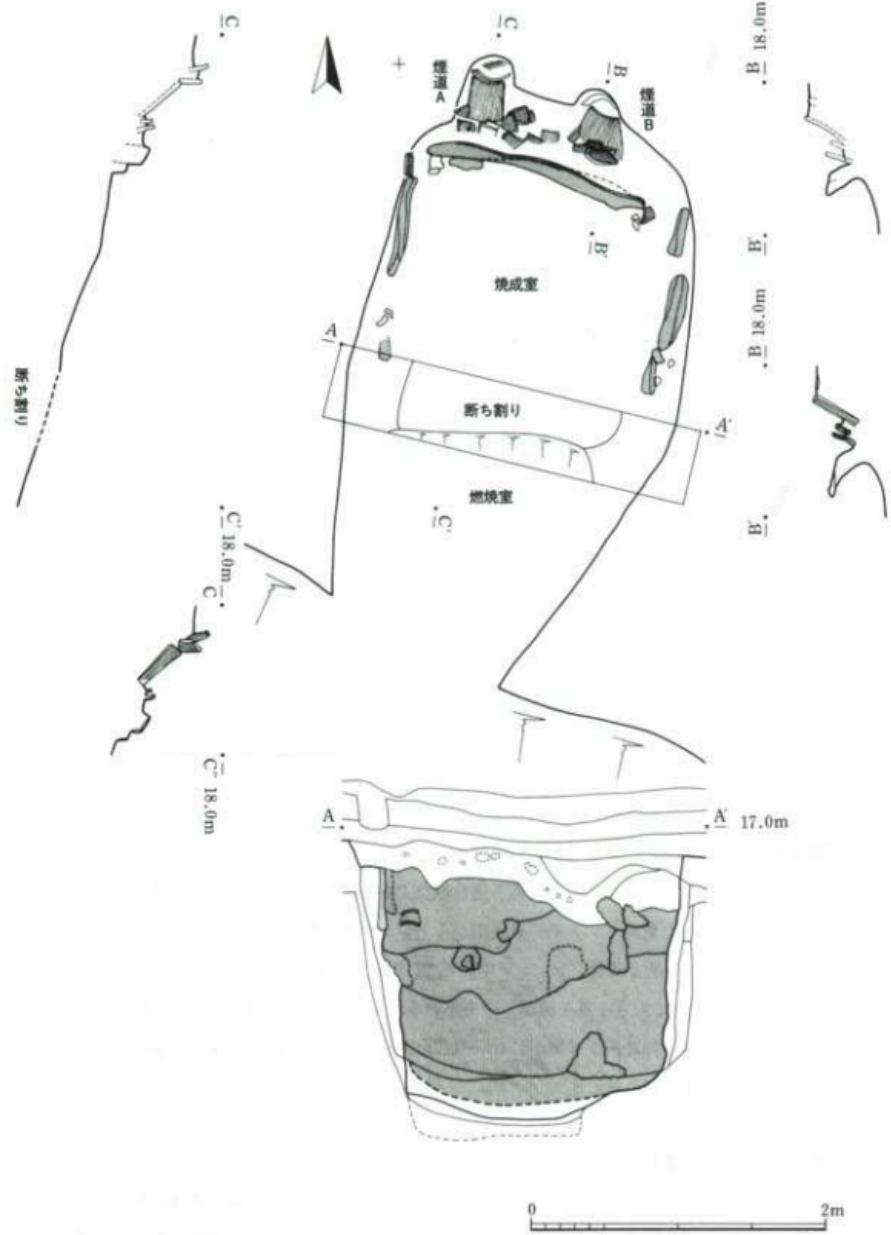
奥壁の外側に張り出して、2か所に煙道をつける。奥壁の中心から均等に並んでいるため、窯構築当初から、2か所の煙道をつけたものと考える。

あらかじめ奥壁の外側に、煙道よりひとまわりり大きな掘り方を掘り、外側には粘質土を貼りつけ、内側は、平瓦を転用し、部材とする。遺構確認面で、煙道Aは2段を確認。周辺におさえとして平瓦破片を使い、補強材としている。

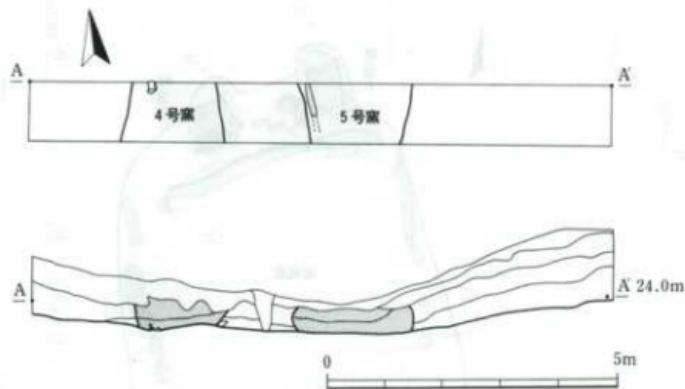


第6図 第5トレンチ

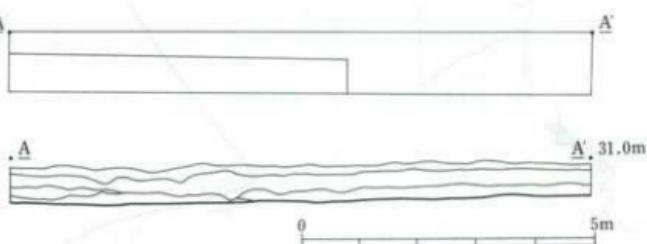
なお、1号窯については、部分的に断ち割りを行った。断ち割り部分は、ちょうど焼成室と燃焼室の境付近である。断ち割り部分内は、ほぼ全層で、窯体ブロックが充満していた。また、焼成室と燃焼室は、燃焼室が1段下がる段があること。焼成室底面は水平ではなく、わずかな傾斜でのぼること。焼成室の断面は、整った逆台形であることが判明した。窯全体の遺存度としては、きわめて良好である。なお、見つかった遺物の状況は、第IV章で述べる。また本トレンチ内で、ほかに見つかった遺構については、第V章 1で全体的に記載している。



第7図 1号窯実測図



第8図 第6トレンチ



第9図 第7トレンチ

5. 第6トレンチ (19T) (第8図 図版5)

本トレンチ付近は、現地形が不自然に落ち込む地点である。トレンチは、地形の落ち込みに直行するように設定した東西トレンチ。表土中からトレンチ中央部および西側で、多量の瓦が見つかった。窯体は2か所で確認。トレンチ中央部の、現地形がもっとも落ち込む場所で1基。それより西へ1.5m離れてもう1基を確認。中央部の5号窯は、西側で側壁の一部を遺存する。確認した部分での窯体の幅は、4号窯が1.4m～1.7m。5号窯が1.6m～2.0m。主軸をほぼ同じ向きとし、強い関連性がある。

6. 第7トレンチ (20T) (第9図 図版5)

第7トレンチは、斜面上段のテラス部に設定した東西トレンチ。その結果、窯体は存在しなかったが、瓦の包含層を確認した。瓦の量は、整理箱(54×33×7.5cm)2箱程度である。明確な遺構に伴うものではない。付近に焼成した瓦を集積した、集積場の存在がうかがえる。

IV 遺 物

1. 概 観

今回の調査で見つかった遺物は、そのほとんどが瓦である。この項では、見つかった遺物を、概観しておきたい。またIII章で述べなかった、見つかった状況についてもまとめておきたい。

見つかった遺物のうち、瓦の総量は、整理箱（54cm×33cm×7.5cm）で150箱である。比較的限定した場所に、確認トレンチを設定したため、本遺跡の、全体的な傾向をとらえたものではないと考える。しかし、トレンチ総面積200m²という、比較的小規模な調査であるにもかかわらず、見つかった瓦の量は多いと判断する。

低地面に設定した第1トレンチ～第4トレンチでは、総量で、整理箱8箱の瓦が見つかった。そのほとんどが小破片である。また平瓦が多く、瓦当面がある軒瓦はごくわずかである。遺物を含む層は一定しており、旧水田面直下から、下層である淡青灰色や黒青灰色のシルト層で見つかっている。本地点付近の基本層序は、以下、青灰色砂層から淡青灰色粘土層となるが、これらの層に瓦はまったく含まれない。ただし砂層中には、古墳時代後期（7世紀代）の土器が含まれている。また粘土層は、一切の遺物を含めて無遺物層である。

1号窯をはじめとして、多くの遺構が見つかった第5トレンチは、瓦の量も圧倒的に多い。今回、見つかった瓦のうち、83%（整理箱124箱）については、本トレンチ（遺構分も含む）内から見つかった瓦である。当初トレンチ内に、「キ字」状にセクションを設けたため、全体で6分割の区切りができた。北東隅を1区とし、時計回りに6区分した。見つかった遺物の小区分けは、この区切りをもとにした。その後、遺構が判明した段階で、明らかに遺構内と断定できる遺物については、遺構内から見つかった遺物としての扱いをした。第5トレンチ内では、1号窯灰原（作業場であるテラス面から見つかったものも含む）、1号窯、3号窯がある。ただし、このうち1号窯及び3号窯については、いずれも遺構確認面であり、埋め土から判断すると、厳密には窯体内ではない。ほとんどの遺物が、窯廃絶後、窯体の崩落（あるいは人為的な破壊）後、上面に堆積した土とともに含まれたものと考えられる。今回、1号窯で窯体内を断ち割ったが、窯体内には、瓦はほとんど遺存せず、窯体の部材に転用した瓦片、あるいは焼台・牀台上に転用した瓦片が、わずかに見つかっているのみである。

第6トレンチでは、窯体を2基確認した。瓦はトレンチ内の窯体付近から、多量に見つかった。ただし本トレンチでも、調査は遺構確認面までであり、厳密な意味で、窯体内のものであるとは断定できない。軒瓦も見つかっているが、瓦当文様に型式の違いは認められない。

第7トレンチは、本遺跡で今回調査をしたなかで、斜面上段に設定したトレンチである。土層は台地平坦面の層序に近い。瓦は小破片が多いが、軒丸瓦の小破片も見つかった。そのほか縄文時代前期の土器片1点が見つかっている。

2. 瓦（瓦の部分名称・製作技術上の用語は、奈良国立文化財研究所「瓦編Ⅰ」解説『奈良国立文化財研究 所基準資料Ⅰ』 1974、および佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 1972による）

軒丸瓦（第10図～第15図、図版6～8）

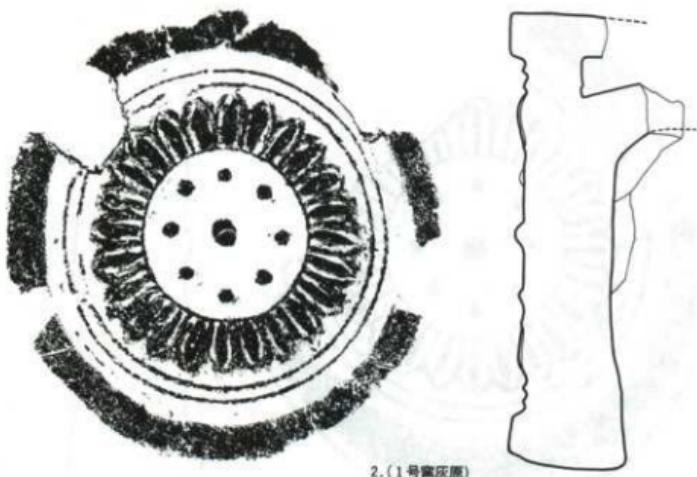
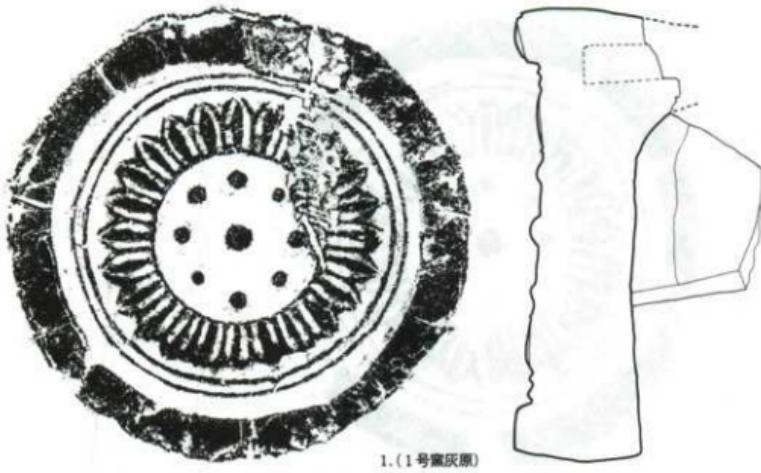
今回の調査で見つかった軒丸瓦の点数は、これから掲載するものも含めて、87点である。掲載以外のものは、第1・2表参照。今回見つかった軒丸瓦は、以前に本遺跡で表採されているもの、あるいは、平成4年度に、当千葉県文化財センターで実施した確認調査時に見つかったものと同型式の瓦で、単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦1型式である。新たな型式の瓦は見つかっていない。ただし、今回明らかになったことの一つに、範は最低2種類存在する。明確な「範きず」が確認できる資料に乏しいため、瓦当面での詳細な区分は不可能であったが、面径・中房径の差が異なることによって、1型式を2種の分類とした。面径・中房径などの差は、当然のことながら、焼き歪みあるいは収縮率によるものも考慮に入れる必要はあるかと考える。しかし、今回見つかった軒丸瓦を含めて、本遺跡で生産した瓦の胎土に、差を見つけることは不可能であった。いずれも、砂粒を多く含むものである。胎土の差は、収縮率に特に大きな影響を与えると考えられる。ところが、2種類の胎土に、顕著な差が認められないことは、上記のような想定が可能であることを示唆している。

以下、瓦当面の部位ごとに、特徴などを記載しておきたい。外縁は、平坦縁。範に凹凸があったのか、面は平滑ではない。無文。内区との境の圓線は、比較的細く2条めぐる。蓮弁は単弁で24枚。蓮弁の幅、長さは均一ではない。瓦当面の遺存度が良好なものについていえば、上部中心から、左側4・5枚目、一つおいて7・8枚目、右側7・8枚目の蓮弁が圓線側に長いという特徴がある。中房内は、蓮子1+8。面は平滑ではなく、微妙に凸面となる。

側面は、比較的丁寧なへら削り。側面に、範型の型押し痕跡を認めるものが多い。すなわち側面の断面で、瓦当面を範型に押しつけたときの凹みが遺存する。また逆に、側面の瓦当面側の端部が、凸状に出っ張っているものもある。側面の調整にかかるものだと考えるが、これに関する調整技法は不明である。

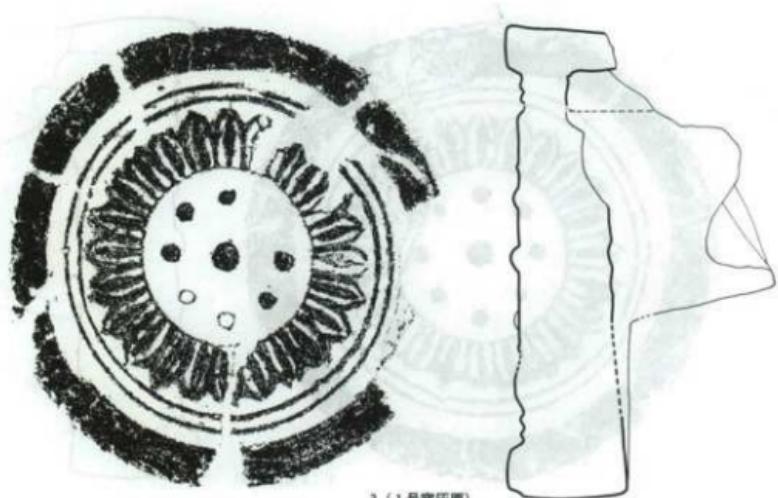
瓦当裏面は、丸瓦部との接合に関する製作技法を含めて述べたい。丸瓦部との接合は、瓦当裏面上部に溝をつけ、丸瓦を差し込む。次に接合面の補強として、丸瓦の凹面側に粘土を埋め込む。接合の際の調整としては、なでによる、やや難な調整を行う。その後、瓦当裏面の縁辺のみを、斜方向にへら削りし、整える。その際、丸瓦部をへらにより、直角にカットしている（写真図版13参照）。丸瓦部を、へら削りにより、直角にカットする技法は、上総光善寺廃寺で見つかっている単弁二十四葉蓮華文軒平瓦に類似がある⁽¹⁾。上記の瓦は、上総国分寺と同範である。

註1 関東古瓦研究会 「第6回 関東古瓦研究会資料 上総・安房編」シンポジウム資料 1983

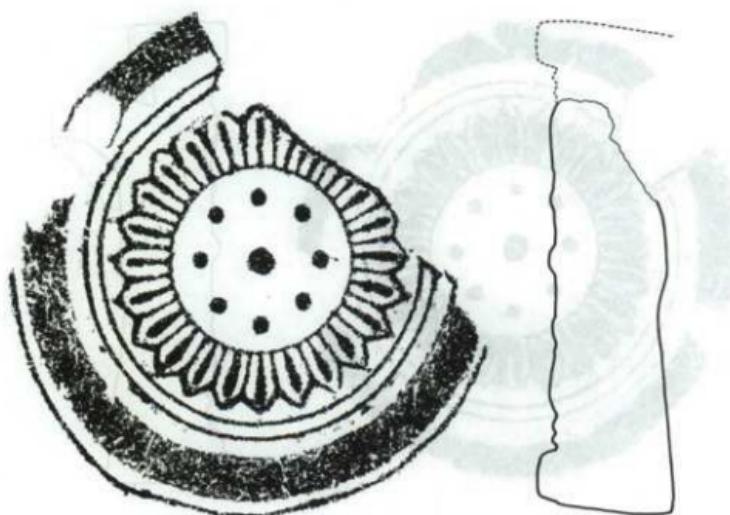


0 10cm

第10図 軒丸瓦実測図 (1)



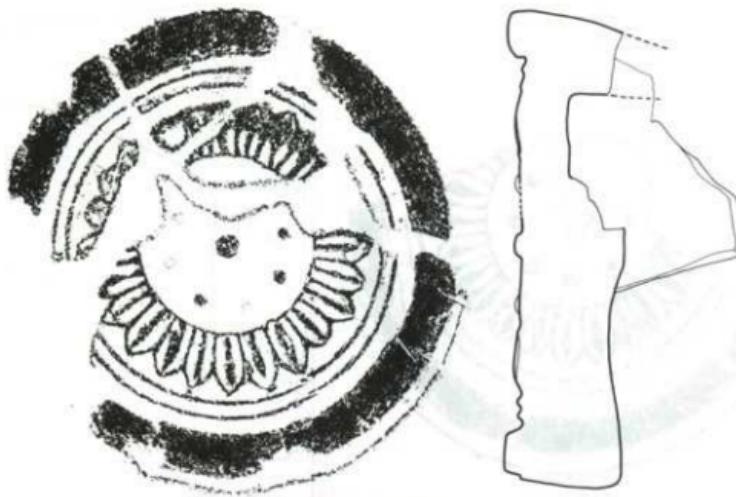
3. (1号窯灰原)



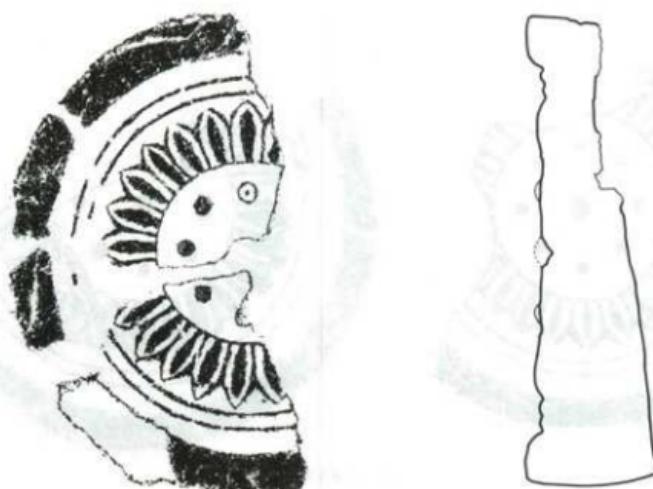
4. (1号窯灰原)



第11図 軒丸瓦実測図 (2)



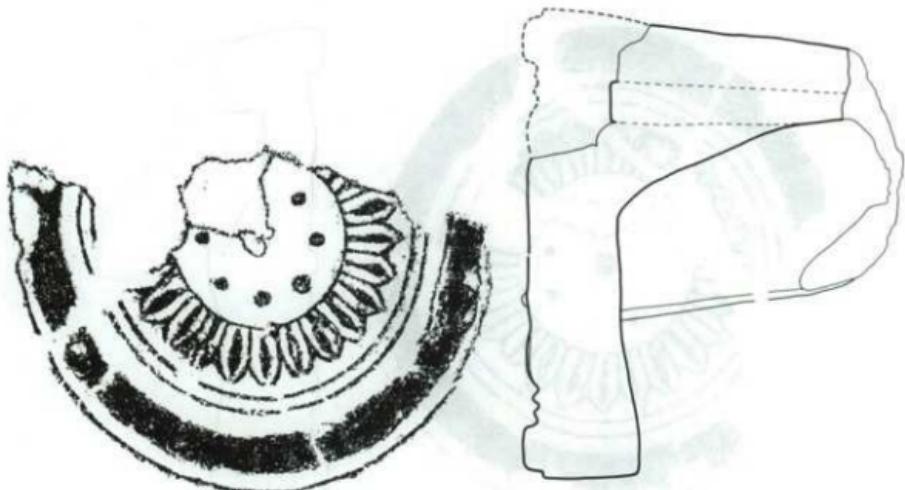
5. (1号瓦灰原)



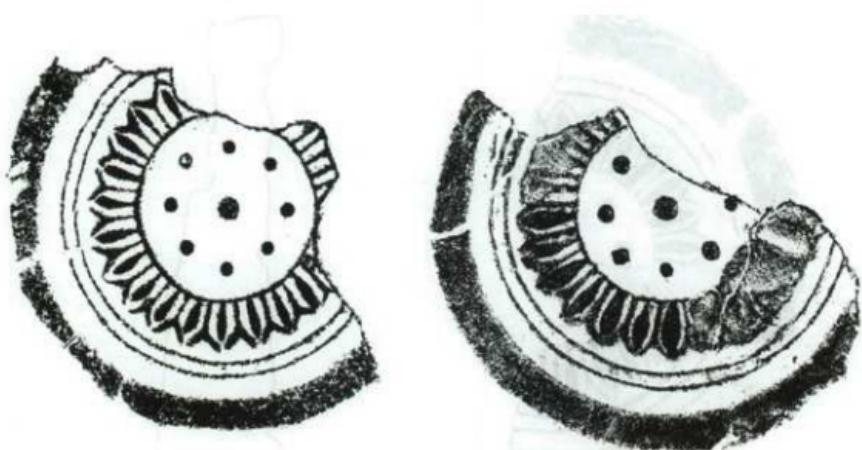
6. (1号瓦灰原)



第12図 軒丸瓦実測図 (3)



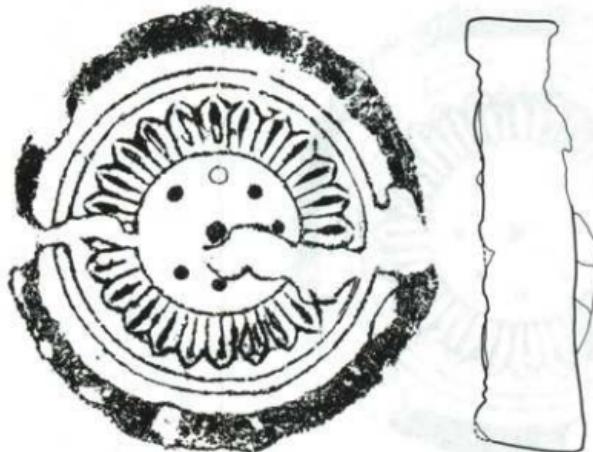
7. (1号窯灰原)



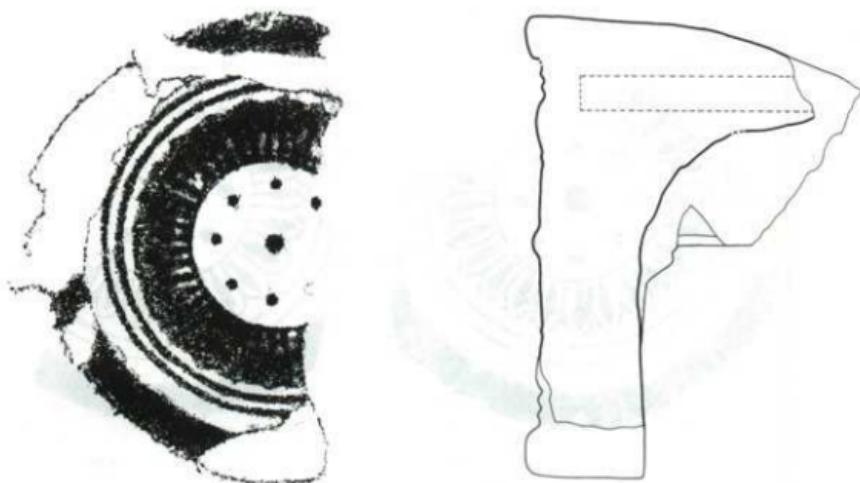
8. (1号窯灰原)



第13図 軒丸瓦実測図 (4)



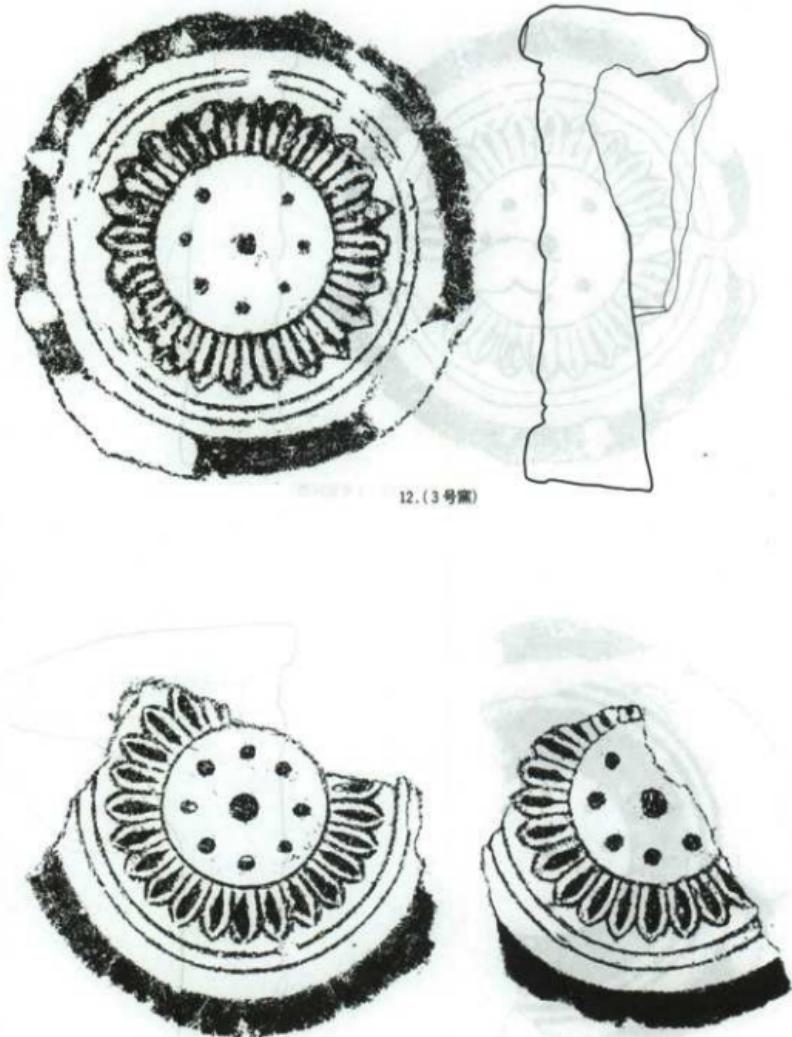
10. (1号窯灰原)



11. (1号窯 5T-2)



第14図 軒丸瓦実測図 (5)



13. (3号窓)

14. (3号窓)



第15図 軒丸瓦実測図 (6)

第1表 川焼瓦窯跡 軒丸瓦一覧(1)

No	名 称	遺構番号	遺存度面 (瓦当面)	焼成	色 調	備 考
1	単弁二十四葉蓮華文	1号窯灰原	10/10	還元焰	暗 灰 色	型抜き後、つぶれあり 側面に型押し痕跡
2	"	1号窯灰原	9/10	還元焰	淡 灰 色	側面に型押し痕跡
3	"	1号窯灰原	9/10	還元焰	暗 灰 色	側面に型押し痕跡
4	"	1号窯灰原	7/10	還元焰	灰 白 色	側面に型押し痕跡
5	"	1号窯灰原	9/10	還元焰	淡 灰 色	側面に型押し痕跡
6	"	1号窯灰原	5/10	還元焰	暗 灰 色	外区外縁にきず?
7	"	1号窯灰原	6/10	還元焰	暗 灰 色	側面に型押し痕跡
8	"	1号窯灰原	6/10	還元焰	淡茶灰色	側面に型押し痕跡
9	"	1号窯灰原	5/10	還元焰	淡茶灰色	型抜き後、つぶれあり 側面、型抜き後調整
10	"	1号窯灰原	10/10	還元焰	暗 灰 色	面透、ゆがみあり
11	"	1号窯・5T-2	6/10	酸化焰	淡茶褐色	焼成不良
12	"	3号窯	10/10	還元焰	灰 白 色	側面、型抜き後調整
13	"	3号窯	7/10	還元焰	暗 灰 色	側面に型押し痕跡
14	"	3号窯	4/10	酸化焰	茶 棕 色	側面、型抜き後調整
15	"	1号窯灰原	1/10	還元焰	灰 白 色	側面に型押し痕跡
16	"	1号窯灰原	2/8	酸化焰	茶 棕 色	焼成不良
17	"	1号窯灰原	2/8	還元焰	暗 灰 色	側面、型抜き後調整 2点未接合
18	"	7T	1/8	酸化焰	茶 棕 色	丸瓦部との接合溝あり
19	"	1号窯灰原	1/8	還元焰	暗 灰 色	中房・蓮弁の一部(上部)
20	"	1号窯灰原	1/10	還元焰	暗 灰 色	外区側面に型押し痕跡
21	"	6T	1/10	還元焰	暗 灰 色	外区外縁にきず?
22	"	1T	1/10	還元焰	淡 灰 色	中房・蓮弁の一部(上部)
23	"	6T	小破片	還元焰	茶灰白色	外区側面に型押し痕跡
24	"	1号窯灰原	小破片	酸化焰	茶 棕 色	中房の一部
25	"	5T-1	1/10	酸化焰	淡茶褐色	外区のみ側面、型抜き後調整
26	"	1号窯灰原	2/10	酸化焰	茶 棕 色	
27	"	3号窯	1/10	酸化焰	明茶褐色	外区外縁
28	"	1号窯灰原	小破片	酸化焰	茶 棕 色	外区外縁
29	"	5T-2	小破片	酸化焰	淡茶褐色	外区外縁
30	"	1号窯灰原	小破片	酸化焰	茶 棕 色	外区外縁 側面に型押し痕跡
31	"	1号窯灰原	小破片	酸化焰	茶 棕 色	蓮弁、界縁の一部
32	"	1号窯灰原	1/10	酸化焰	淡茶褐色	中房・蓮弁の一部
33	"	1号窯灰原	1/10	還元焰	淡茶灰白色	外区外縁
34	"	4T	小破片	還元焰	淡灰白色	
35	"	1号窯灰原	3/8	還元焰	淡 灰 色	側面に型押し痕跡
36	"	1号窯灰原	4/10	還元焰	暗 灰 色	中房・蓮弁の一部
37	"	2T	2/10	還元焰	淡灰白色	中房・蓮弁の一部(上部)
38	"	3号窯	1/10	還元焰	暗 灰 色	外区外縁、蓮弁の一部 型抜き良好
39	"	3号窯	2/10	還元焰	暗 灰 色	型抜き良好
40	"	1窯灰原・3号窯	2/10	還元焰	暗 灰 色	側面に型押し痕跡 型抜き良好
41	"	1号窯灰原	1/10	還元焰	暗 灰 色	外区外縁・蓮弁の一部
42	"	3号窯	小破片	還元焰	暗 灰 色	外区外縁の一部
43	"	1号窯灰原	3/10	還元焰	灰 白 色	側面に型押し痕跡 蓼弁磨滅
44	"	1号窯灰原	小破片	還元焰	灰 白 色	外区外縁の一部
45	"	1号窯灰原	1/10	還元焰	灰 白 色	外区外縁・蓮弁の一部

第2表 川焼瓦窯跡 軒丸瓦一覧(2)

No	名 称	遺構番号	遺存度 (瓦当面)	焼 成	色 調	備 考
46	単弁二十四葉蓮華文	1号窯灰原	1/10	還元焰	灰白色	
47	〃	1号窯灰原	2/10	還元焰	灰白色	蓮弁磨滅
48	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	灰白色	蓮弁の一部
49	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	灰白色	蓮弁の一部
50	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	灰白色	蓮弁の一部
51	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	灰白色	外区外縁の一部
52	〃	1号窯灰原	2/10	還元焰	暗灰色	外区外縁・蓮弁の一部 側面に型押し痕跡
53	〃	3号窯	1/10	還元焰	淡灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
54	〃	3号窯	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
55	〃	1号窯灰原	6/10	還元焰	灰白色	瓦当面の磨滅激しい
56	〃	3号窯	1/10	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
57	〃	1号窯灰原	1/10	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
58	〃	5T-6	2/10	還元焰	淡灰色	
59	〃	5T-6	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
60	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	蓮弁の一部
61	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
62	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	蓮弁の一部
63	〃	5T-1	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁の一部
64	〃	5T-6	小破片	還元焰	淡灰色	側面から外区外面に工具痕 型押し痕跡
65	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
66	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
67	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	蓮弁の一部
68	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁・蓮弁の一部
69	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁の一部 蓮弁磨滅
70	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	中房・蓮弁の一部
71	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
72	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡茶色	砂粒きわめて多い
73	〃	5T-1	1/10	還元焰	淡灰色	型抜き良好
74	〃	5T-6	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
75	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡茶灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
76	〃	5T-6	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
77	〃	5T-2	小破片	還元焰	淡灰色	側面に型押し痕跡 丸瓦部との接合明瞭
78	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡灰色	瓦当面の磨滅激しい
79	〃	1号窯	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁・蓮弁の一部
80	〃	5T-6	小破片	還元焰	淡茶灰色	瓦当面の磨滅激しい
81	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
82	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗灰色	外区外縁の一部
83	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁の一部
84	〃	6T	小破片	還元焰	淡灰色	中房の一部
85	〃	不明	小破片	還元焰	淡灰色	外区外縁の一部 側面に型押し痕跡
86	〃	不明	小破片	還元焰	淡茶灰色	蓮弁の一部
87	〃	不明	小破片	還元焰	灰白色	蓮弁の一部

軒平瓦 (第16図～第17図、図版8)

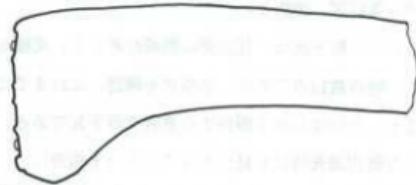
今回の調査で見つかった軒平瓦は、瓦当面の磨滅が激しく、文様がほとんど確認できない1点を除き、掲載した。総点数13点である。2型式を確認。これまでにも公表されている同型式の均整唐草文軒平瓦と、今回はじめて報告する重郭文軒平瓦である。なお、重郭文軒平瓦は、平成4年度に実施した確認調査時にも見つかっている(未報告)。

1～5・8・10は、均整唐草文軒平瓦である。内区文様を失っている6や、磨滅して確認できなかった7・11・12も、おそらく同型式であろうと考える。ただし、良好な資料がなく、全体をうかがえるものがない。1は、中心飾りから第1単位まで遺存する資料であるが、曲線顎も非常に丁寧であり、シャープである。8は、中心飾りまで達しないが、唐草文様については、おそらく4回反転した資料であろう。珠文の配置もやや狭く、唐草文様の幅も大きい。ほかのタイプと若干異なる範の可能性もある。また曲線顎もくずれている^(註2)。

註2 宮本敬一氏より、菊間庵寺跡で見つかっている均整唐草文軒平瓦と、同範ではないかとのご教示をいただいた。

第3表 川焼瓦窯跡 軒平瓦一覧(1)

No	名 称	遺構番号	遺存度 (瓦当面)	焼 成	色 調	備 考
1	均 整 唐 草 文	1号窯灰原	2/10	還元焰	暗 灰 色	中心飾りから第1単位 曲線顎 下外区に型押し痕跡 平瓦部、凸面へら削り、凹面布目圧痕 文様はきわめて端正で整っている。
2	〃	5T-2	1/10	酸化焰	茶 楠 色	上外区から中心飾りの一部 文様、中心飾りは剥離が激しいが、きわめて整っている。
3	〃	1号窯	3/10	酸化焰	茶 楠 色	第2～第3単位 脇区剥落 曲線顎 文様は比較的端正で整っている。
4	〃	2T	小破片	還元焰	暗 灰 色	下外区の一部 下外区に型押し痕跡 顎は曲線気味 遺存する文様は比較的シャープ。
5	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗 灰 色	下外区の一部 下外区に型押し痕跡 曲線顎
6	〃	1号窯灰原	小破片	還元焰	暗 灰 色	上外区の一部
7	〃	1号窯灰原	小破片	酸化焰	茶 楠 色	脇区～上外区 文様の磨滅激しい。曲線顎
8	〃	1号窯	5/10	酸化焰	茶 楠 色	第1単位～第4単位 脇区まで 珠文の間隔やや狭い。唐草文様がやや太い。曲線顎であるがややだれています。平瓦部、凸面などで、へら削り全体的に厚みあります。
9	重 郭 文	5T-6	8/10	還元焰	濃 灰 色	未接合で2点有り 曲線顎 きわめて丁寧なつくり 郭の幅が狭くなる箇所有り。瓦当面に付着物有り。平瓦部、凹面布目圧痕 凸面へら削り焼成、堅敏。
10	均 整 唐 草 文	3号窯	3/10	還元焰	暗 灰 色	瓦当面焼成中に融着。文様の遺存状態不良。
11	〃	3号窯	2/10	酸化焰	茶 楠 色	瓦当面の磨滅激しい。
12	〃	3号窯	1/10	酸化焰	淡茶褐色	下外区の一部 文様の磨滅激しい。
13	〃	1号窯灰原	3/10	酸化焰	茶 楠 色	瓦当部の磨滅激しく、文様不明。



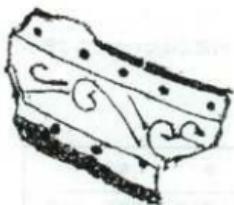
1. (1号瓦灰原)



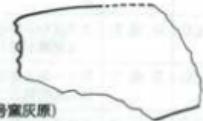
2. (5T-2)



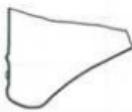
4. (2T-2)



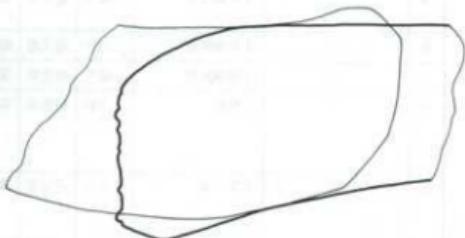
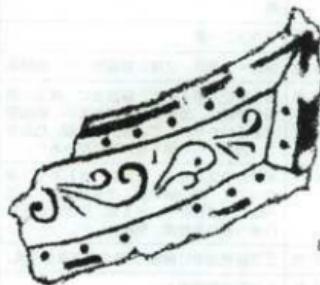
3. (1号瓦)



6. (1号瓦灰原)



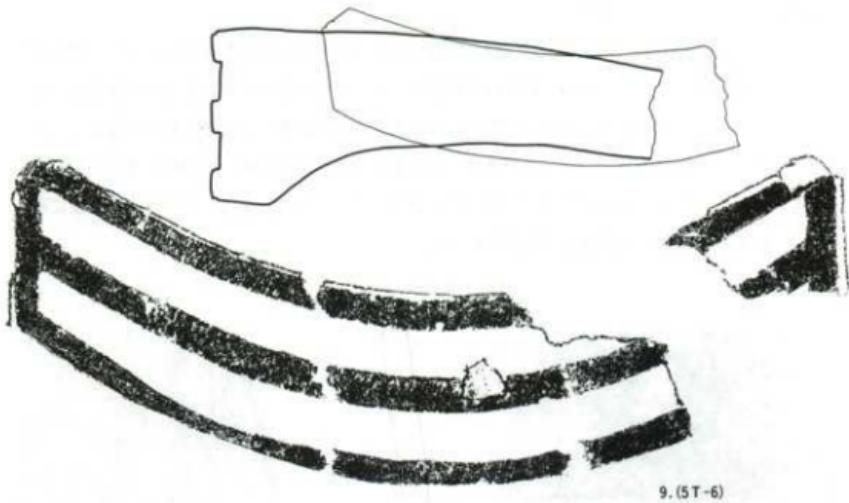
7. (1号瓦灰原)



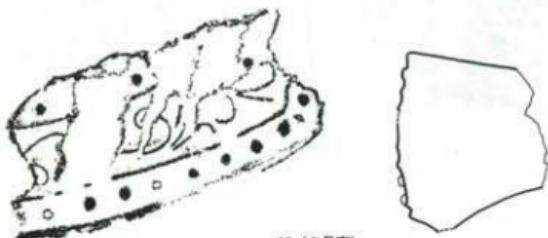
8. (1号瓦)



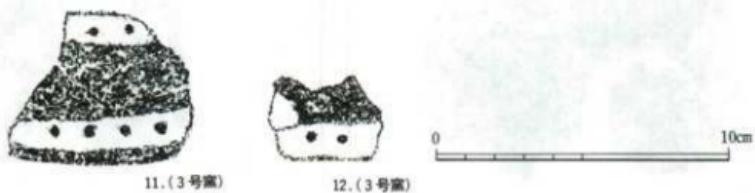
第16図 軒平瓦実測図 (1)



9. (5T-6)



10. (3号窯)

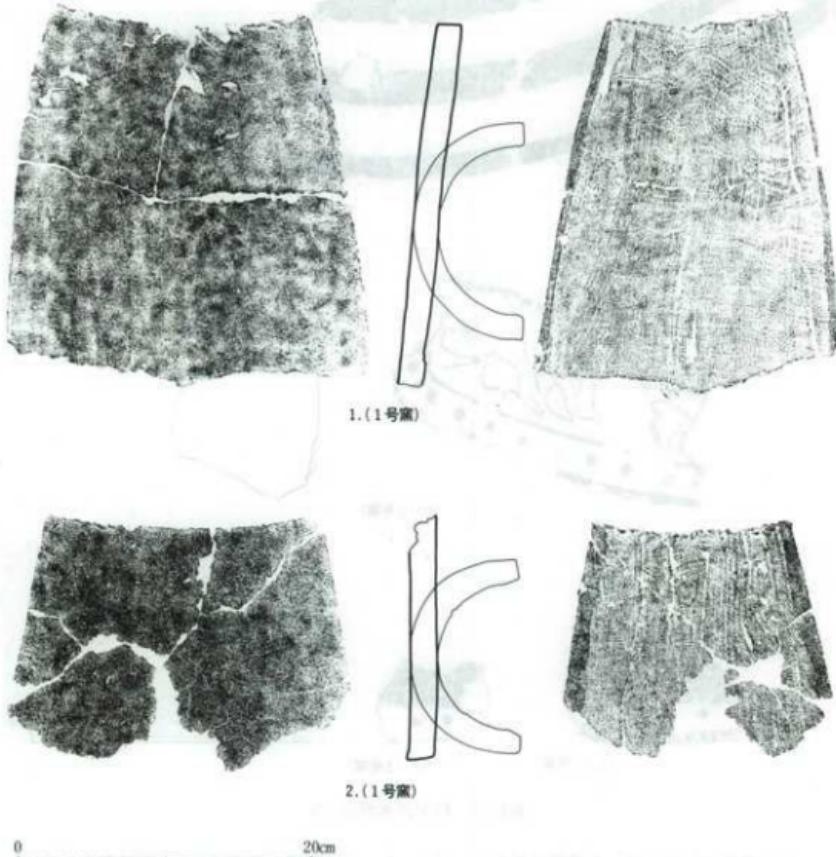


第17図 軒平瓦実測図(2)

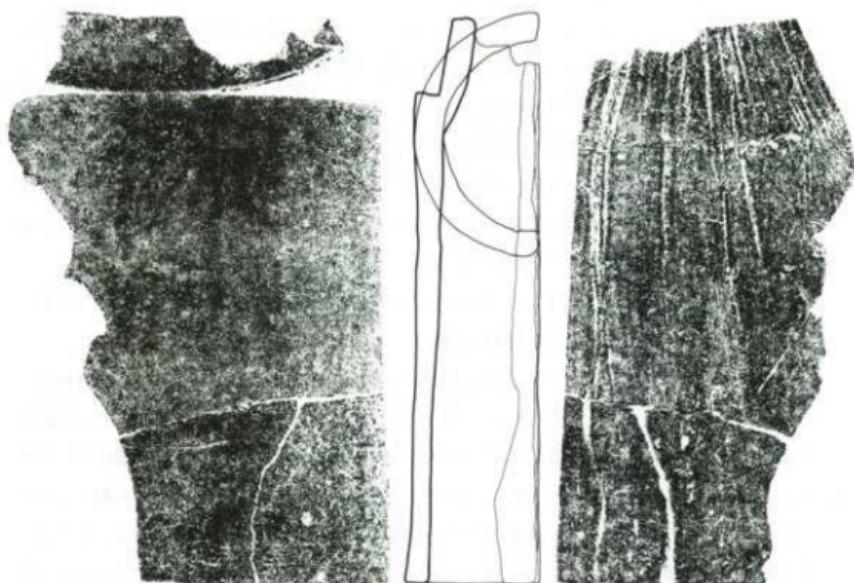
9の重郭文軒平瓦は、本遺跡の瓦のなかでも、もっとも堅緻な焼成である。曲線顎もきわめてシャープ。瓦当文様の特徴は、内区内の郭幅が、左側の一部で狭くなる。平瓦部凹面の側面は、きわめて丁寧なへら削りをする。

丸瓦 (第18図～第19図)

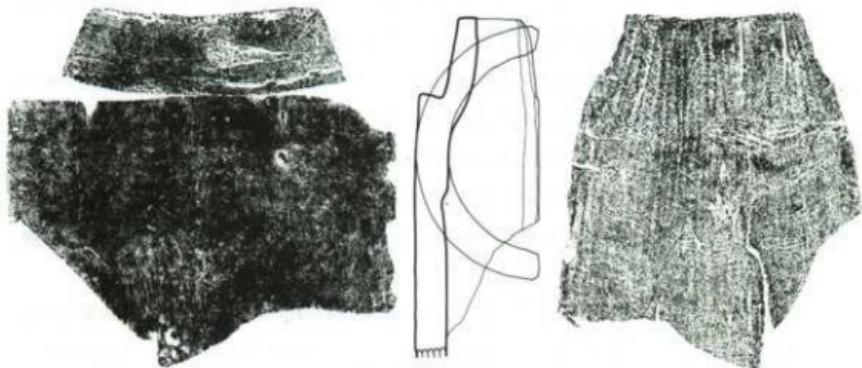
見つかった瓦のうち、丸瓦については、玉縁丸瓦と行基丸瓦の2種類が見つかった。数量的には、詳細に数えなかったため、具体的な数値ではないが、玉縁丸瓦と行基丸瓦の区別が可能な部位（両端部）で判断する限り、圧倒的に玉縁丸瓦のほうが多く、行基丸瓦の点数はごくわずかである。2種類の瓦とも、製作技法は、凸型台を使用した成形後、凸面に丁寧なまでを行っている。このため、凸面の叩き目はまったく遺存していない。凹面は、布目压痕が明瞭に残る。玉縁丸瓦の玉縁部の幅は、平均5.2cmである。



第18図 丸瓦実測図 (1)



3. (1号窯灰原)



4. (6T-1)

0 20cm

第19図 丸瓦実測図 (2)

平瓦 (第20図～第22図・図版12・13)

見つかった平瓦は、総量としてもっとも量が多い。整理箱 (54cm×33cm×7.5cm) 数で112箱、瓦総量150箱の75%をしめる。すべてが第1次成形で凸型台を使用した1枚作り。ただし、平瓦の大分類としては、ごく限られた種類しか見つかっておらず、凸面の叩き目の区分では、繩叩き目のみである。わずかに1点だけ斜格子叩き目の平瓦が見つかった。小破片であり、図化していない。凸面繩叩き目の平瓦は、大別するとさらに細かな種別に分けることができる。今回は時間的な制約があり、すべての破片を詳細に区分することが不可能なため、本報告では、繩叩き目のおおむねの種別をあげておくことにとどめる (37頁に記載)。

本報告で掲載したものは、見つかった瓦のほんの一端である。これらの特徴などをとりまとめながら、今回見つかった平瓦の全体的な傾向について述べておきたい。

第20図1は、本遺跡で見つかった平瓦のなかで、ほぼ完形となるものである。この資料は、本遺跡の平瓦の標準モデルの一つとした。重量は3.14kg。焼成は還元焰、堅緻であり、色調は淡灰色。凸面は繩叩き目。側面にはほぼ並行する方向に叩く。繩目の大きさは、本遺跡での標準的な大きさである。両側面はへら削り。また、凹面側縁を比較的シャープに、へら削りにより面取りする。この面取りは、本遺跡で見つかった平瓦の基本的な特徴の一つである。へら削りによる面取りの幅は、まちまちであるが、側縁から1.0cmほどの幅があるものもある。凸面の広端面には、内側に向かって端縁が若干めくれている。凹面は、布目圧痕。1枚作りであることを端的に示す (写真図版12-1・13-4 参照)。なお1は、凹面の中央に、へらにより2分割しようとした痕跡を残す。これは、まぎれもなく平瓦を2分割して、熨斗瓦2枚をつくる工程で行うものである。また、ほかにも、凹面上に上記のような分割線を残した瓦の類例がある。

2もほぼ完形の平瓦。焼成は還元焰であるが、やや不良である。色調は灰白色。凹面の最終調整として、布目圧痕を何らかの道具で消している。特に狭端面で顕著に確認した。同様な最終調整は3でも確認した (写真図版12-2 参照)。こちらは明らかに凹面に7条の平行な工具痕がある。工具痕の幅は2.0cm～3.5cm。へら削り痕とは異なり、布目圧痕を消したのちに、砂粒の動きはない^(注3)。なお3は、本遺跡で見つかった平瓦のなかで、もっとも焼成が良好で、堅緻なものである。

4～6は、色調が茶褐色の平瓦である。これらは窯で焼かれたものの、焼成中、酸素を供給し続けた結果の所産である。便宜上、酸化焰焼成とよぶ。全体的な傾向として、本遺跡で見つかった平瓦は、2種類の焼成による瓦を生産している。窯の構造からいえば、当然還元焰焼成が中心となるかと考えられるが、見つかった瓦全体の数量比較では、還元焰焼成62%、酸化焰焼成38%の割合である。また、色調については、還元焰焼成の瓦について、おおむね2種類に分けることができる。一つは暗灰色で、もう一つは淡灰色あるいは灰白色である。淡灰色と灰白色は、厳密にいえば異なる色調であるかもしれないが、分類上、識別が困難なこともあります。

り、2種類の区分とした。還元焰焼成の瓦のうち、暗灰色が52%、灰白色が48%の割合である。次に、見つかった瓦のなかでもっとも量の多い平瓦と丸瓦について、一部の数量処理を行い、本遺跡で生産した瓦の本質を、できるだけとらえておきたい。

生産遺跡において、瓦の数量計測を試みることは、瓦の生産の場における操業形態を復元するため、不可欠な作業である^(註4)。註4文献によると、生産遺跡で見つかる瓦の特性には、次のようなことがあげられる。消費地へ供給されずに廃棄した製品であること。窯詰めの状態で廃棄したもの以外は、ほとんどが生産の場で生じた破損品であること。完形品は少なく、焼けひずみなどの変形があること。一方で、消費遺跡で見つかったものと比較して、移動や使用による表面の磨滅や破損が少なく、屋瓦としての目的を果たす以前に廃棄したものであるから、意図的な破壊がないこと。小破片が圧倒的に多いこと。消費遺跡と比較して、型式分類が容易で、製作技術の解明や操業形態の復元に適していること。以上の大きな特性があげられる^(註5)。

そして、その方法については、隅数計測法、側面長計測法、端面長計測法、面積計測法、重量計測法、破片数計測法があげられる。

今回は時間的制約から、おもに平瓦と丸瓦について、重量計測法と、破片数計測法の代替として整理箱数比による概略的な総量比較を行うこととする。なお、上記にあげた計測法を複数おこなうことによって、得たデータのクロスチェックが可能となり、データの差が何によるかを想定することにより、より実態に近い総枚数などの絶対値が得られる^(註6)。その意味では、この報告で扱う計測法のみでは、データのクロスチェックが不可能であり、不十分である。基礎データの作成を含めて、あらためて機会を設ける必要がある。

見つかった瓦のうち、平瓦の総数112箱の瓦重量は、506.25kg。標準モデルとした完形(ほぼ完形を含む)の平瓦から得た1枚の重量は3.14kg。このモデルに基づけば平瓦161枚に相当する量である。一方、丸瓦の総数12箱の瓦重量は45.4kg。完形品の瓦がなく、標準モデルが作れないので、枚数は不明である。平瓦と丸瓦の量比は、丸瓦の量が平瓦に対して8.9%。10%にも満たない。また、丸瓦の項でも述べたように、玉縁丸瓦が圧倒的に多いことが指摘できる。軒丸瓦の点数は87点。それに対して軒平瓦の点数は13点。あくまでも今回見つかった瓦の総量ではあるが、このデータからどのようなことが見いだせるのか^(註7)。第V章で述べたい。

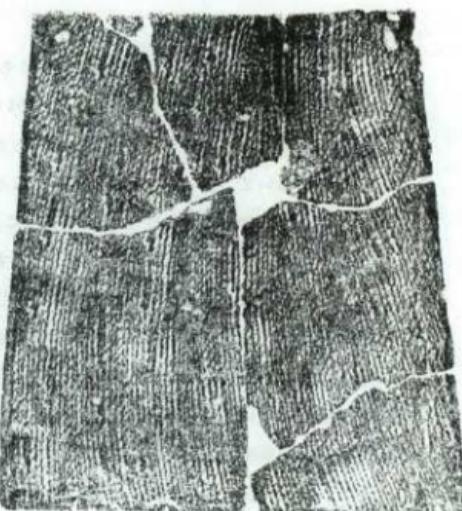
註3 今泉 漢氏より、平瓦狭端面の曲率を修正するために行った調整ではないか、とのご教示をいただいた。

註4 五十川伸矢 「平瓦の数量的方法の分析－生産遺跡出土平瓦の場合－」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1986

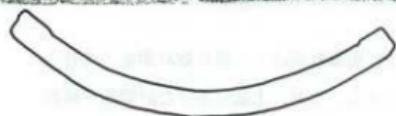
註5 註4文献

註6 今泉 漢 「「瓦と建物の相剋」試論－大塚前遺跡出土瓦の分析－」『研究紀要 12』 (財)千葉県文化財センター 1990

註7 平成4年度の確認調査で見つかった丸瓦・平瓦も同様に平瓦が圧倒的に多い。ただし、基礎分類のみで未計測。

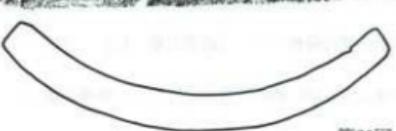


1. (1号窓灰原)

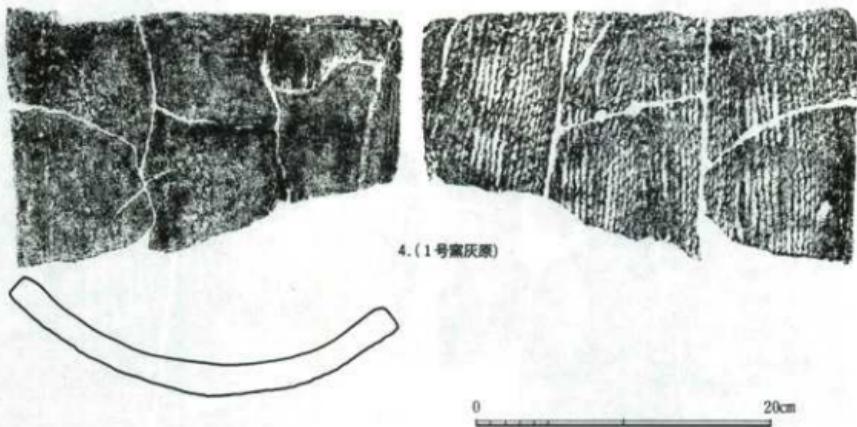
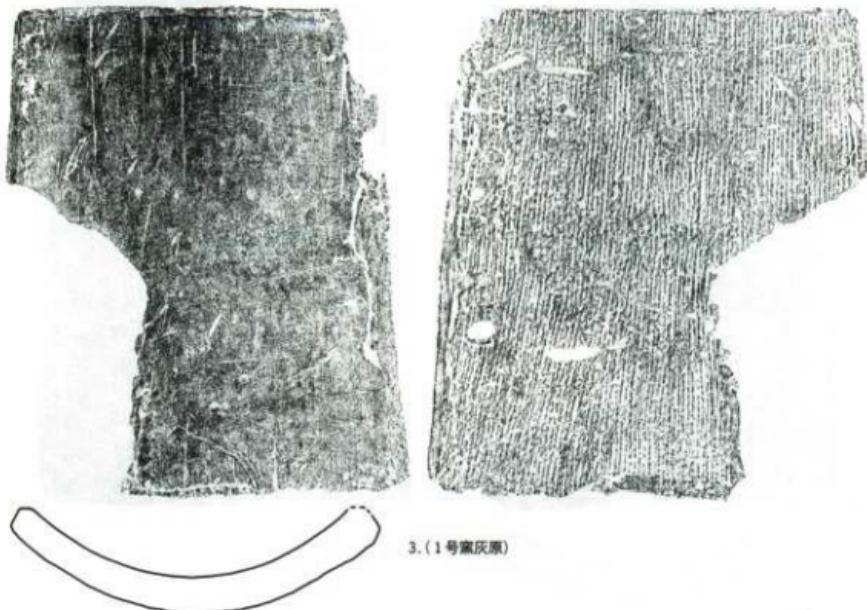


2. (1号窓灰原)

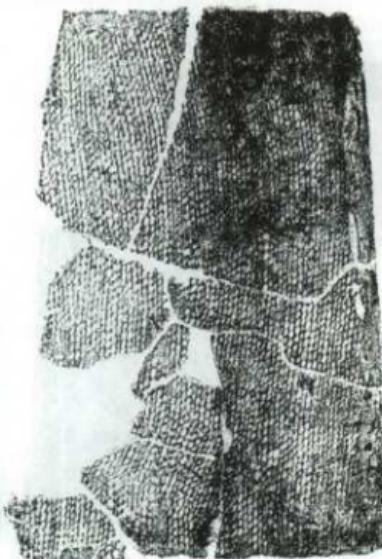
0 20cm



第20図 平瓦実測図 (1)



第21図 平瓦実測図 (2)



5. (3号窓)



6. (3号窓)



0 20cm

第22図 平瓦実測図(3)

特殊な道具瓦として、隅切り平瓦、熨斗瓦を確認した。また本来は平瓦の種類であろうが、隅落し平瓦^(註8)とよんでいる瓦の一群をここで掲載した。

隅切り平瓦 (第23図、図版11)

平瓦の端面の一部を切り落とす隅切り平瓦が7点見つかった。このうち端面の位置が明確である3点を掲載した。

1は、広端面の凹面左側を45°切り落とす。焼成は還元焰、堅緻である。切り落としはへらで行い、やや凹みをもつカーブとなる。切り落とした凹面側の端縁には、その後調整を加えておらず、切りっぱなしである。

2は、広端面の凹面右側を50°切り落とす。焼成は還元焰。色調は淡灰色。切り落とし後、切り落とした凹面側の端縁を、丁寧にへら削りしている。へら削りは、切り落としている広端面側にも同様に行っている。

3は、広端面の凹面左側を67°切り落とす。焼成は還元焰。凹面の切り落とした端面に沿って、布端を認めた。成形時に、布端を意図的にあてたものか。

隅落し平瓦 (第23図)

隅落し平瓦は、平瓦の隅のいずれかを鋭く切り落とすものである。道具瓦としての隅切り瓦とは異なり、おそらく機能的には何も意味のないものと考えられている。工人の「くせ」であろうか。側面や端面の最終調整をおこなううえで切り落とされている。本遺跡での出現率は、具体的な数値では示せないが、川崎市寺尾台廃寺跡で指摘されたような、平瓦の主体をなすものや^(註9)、東京都多摩ニュータウン遺跡No513遺跡Iでの、平瓦総量の11%という出現率というものではなく^(註10)、きわめて特異なものである。

1は、側面側から15°切り落とし、その後、凸面側の側縁をへら削りする。2は、側面側から24°切り落とす。

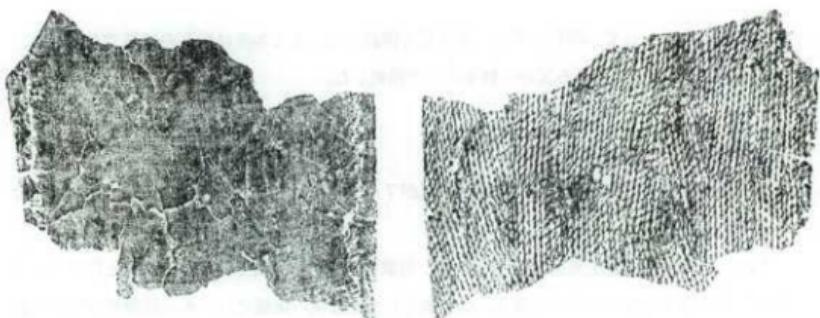
熨斗瓦 (第24図～第25図・図版9～10)

熨斗瓦は、両側面が確実に遺存するものを図化し、掲載した。確実な熨斗瓦は10点である。また、本遺跡の熨斗瓦の特徴として、側面をほぼ直角に切り落とし、凸面側縁は、へら削りをしないことがあげられる。平瓦の凸面側縁にへら削りをすることと対照的である。

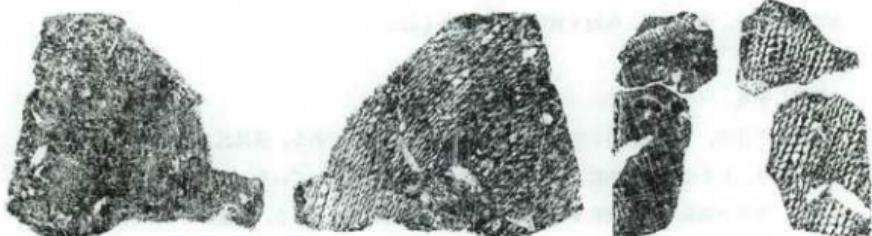
註8 加藤 修他 「多摩ニュータウン遺跡-No513遺跡I」 (財) 東京都埋蔵文化財センター 1982

註9 内藤政恒 「川崎市寺尾台瓦塚廃寺跡調査報告」「川崎市文化財調査報告第一冊」 1954

註10 註8文献



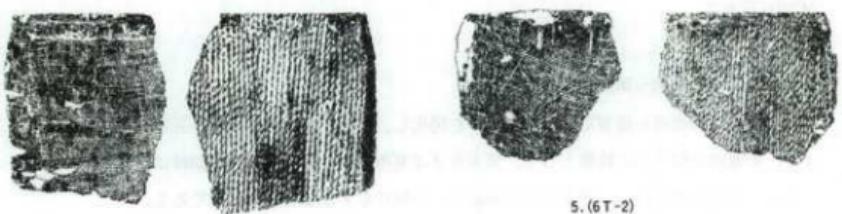
1. (3号窓)



2. (1号窓)



3. (3号窓)

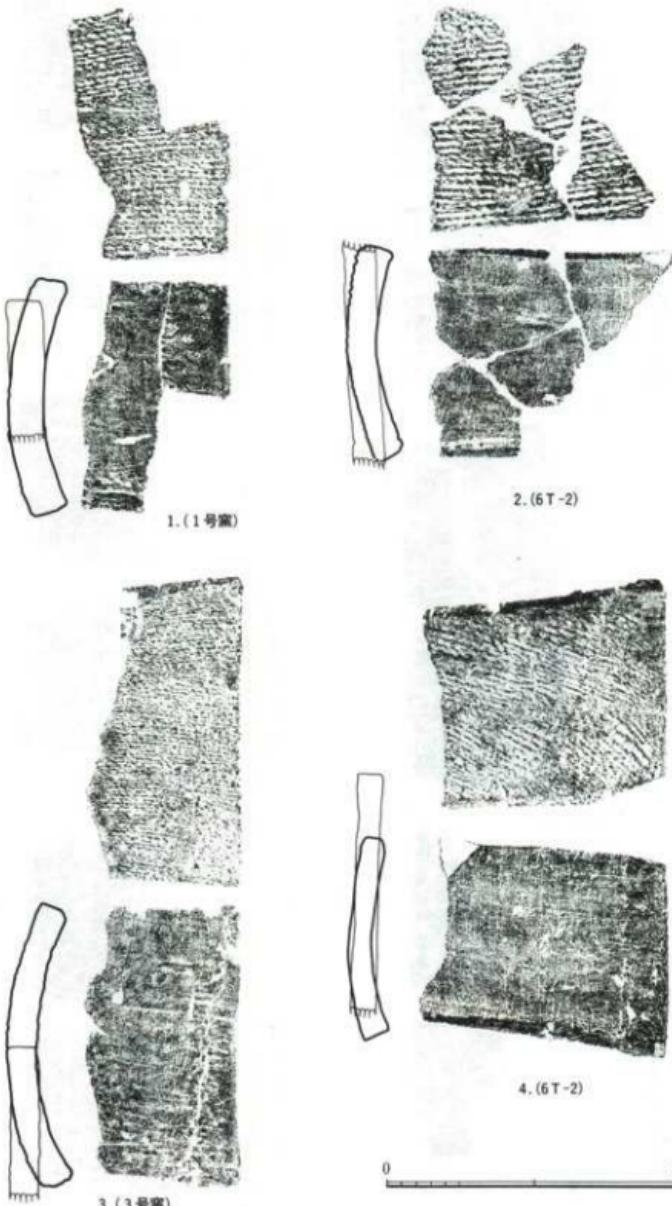


5. (6T-2)

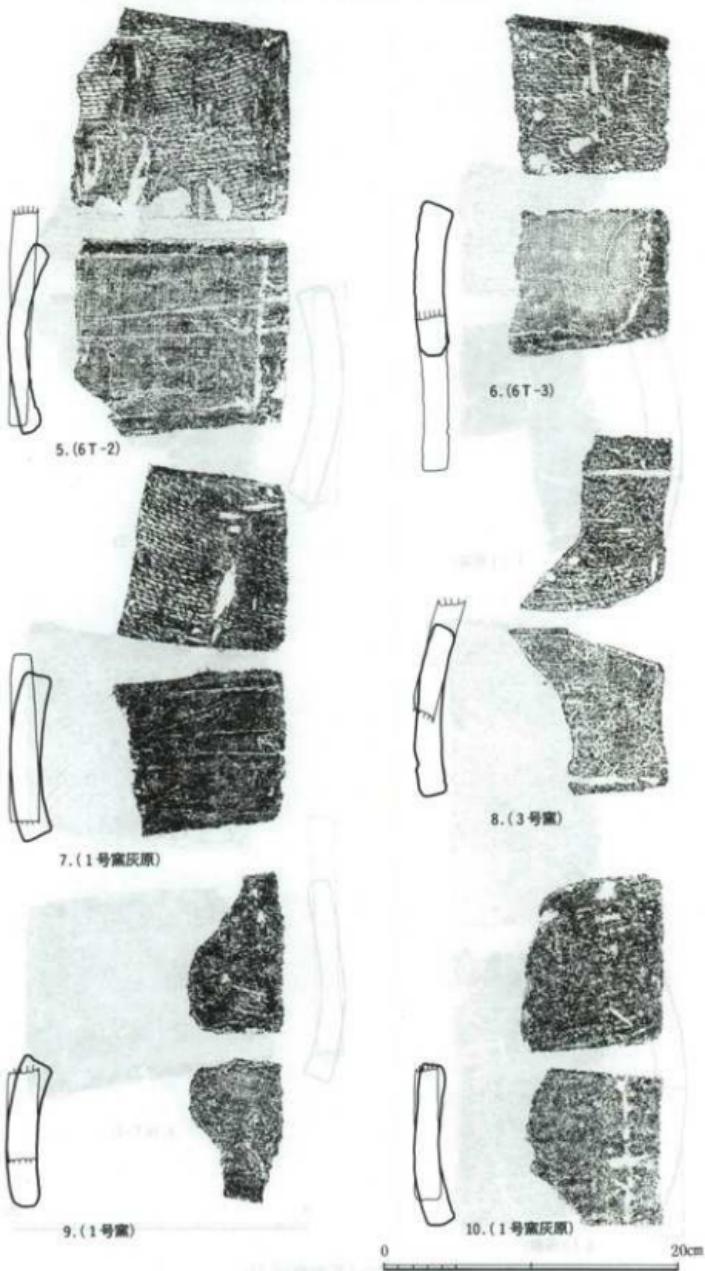
4. (1号窓灰原)



第23図 隅切り瓦・隅落し平瓦実測図



第24図 燬寸瓦実測図(1)



第25図 焼寸瓦実測図 (2)



第26図 平瓦凸面の繩叩き痕跡と凹面の調整痕

このことを基準にして抽出した熨斗瓦の点数は、34点となる。もちろん、可能性としては、両側面を欠損する熨斗瓦の存在も否定できない。このため、抽出した点数は、あくまで「～以上」というただし書きとなる。なお、本遺跡北側台地平坦面で調査した川焼台遺跡で、完形の熨斗瓦が見つかっている(未報告)。平瓦を2分割したものである。熨斗瓦の標準モデルとなり、重量は2.12kg。今回、本遺跡で見つかった熨斗瓦は、平瓦を2分割するもの以外に、3分割したものも存在する。

瓦製作技法 (第26図、図版12・13)

第26図に示したのは、平瓦凸面の繩叩き目と、凹面の調整痕である。平瓦の項で述べたように、ここでは凹面の叩き目のおおむねの分類を述べるにとどめる。なお、平瓦凹面の繩叩き目の多くは、第20図～22図で掲載したタイプのものである。図の1・4は、凸面の繩叩き目が細いタイプ。2は繩叩き目が粗いタイプ。3は斜方向繩叩き目のタイプ。4の凹面は、広端面側の布目圧痕の上に施した、斜方向の調整痕である。工具は不明。

焼台(牀台)に転用した平瓦 (図版13)

平瓦を転用し、焼台(もしくは牀台)にしている。平瓦を立てた痕跡を明瞭に残している。痕跡が遺存する幅は、1.5cm～3.0cm。確認できる幅は5か所で、平均値は2.1cmである。

V まとめ

1. 窯跡群の構成と窯構造

今回、調査をした川焼瓦窯跡について、窯跡群全体の構成についてまとめておきたい。すでに第Ⅰ章で述べたように、本遺跡は、平成4年度に遺跡範囲を確認する調査を実施している。ここでは、その調査での成果もふまえて述べておく。

まず、瓦窯跡は全体で5基確認した。第5トレンチ内で、今回断ち割り調査を行い、窯構造を解明した有牀（ロストル）式平窯を含めて2基（1号窯・3号窯）。3号窯も、確認した窯体崩落後の埋め土の規模から判断すると、有牀（ロストル）式平窯であろうか。1・3号窯の東側で、平成4年度の確認トレンチで見つかっている1基の2号窯。窯体は2か所で確認。有牀（ロストル）式平窯であれば、2基に分かれる可能性もある。とすれば瓦窯跡は6基となる。

さらに、斜面上段で調査した第6トレンチで見つかった2基（4号窯・5号窯）。5号窯は、側壁の一部が遺存しているが、1号窯の側壁同様、ほぼ垂直に立ち上がっていることや、窯幅が広いことなどから、やはり有牀（ロストル）式平窯である可能性が強い。

これらの窯は、かなり急な斜面上に立地している。このため、付随する施設として、作業場の機能をはたす平場が必要なはずである。斜面裾部に現況でもテラス面が遺存しているが、1号窯あるいは2号窯とした窯体の一つの平場（作業場）として、斜面裾部のテラス面が機能していたと考えられる。

第5トレンチ内では、3号窯焚き口付近の脇に、東側に延びる明確な落ち込みを確認した。これを作業場としての平場と判断したが、第5トレンチ外側のさらに東側に、現地形の傾斜が若干ゆるやかになる場所へ続いている。平成4年度の確認調査では、その地点で灰原を確認しており、2号窯の窯体も存在する。このことから、第5トレンチ内で確認した平場は、東側へ続いて、斜面裾部同様、テラス面を構成するものと想定した。

さらに、第6トレンチで見つかった4号窯・5号窯の付近にも、現斜面がゆるやかになる個所もあり、同様なテラス面の想定が可能である。

このように、本遺跡で見つかった5基の瓦窯跡は、斜面裾部から斜面下段あるいは斜面中段に位置し、3段の段構造で構成される。また、第6トレンチ内の2基が典型的なように、2基単位で同時操業をしている可能性もある。

第7トレンチを設定した斜面上段では、今回も明確な遺構は確認できなかった。ただし、付近には現地形で、面積の広いテラス面が存在する。現段階では想定となるが、このテラス面に、瓦成形あるいは瓦集積などに付随する瓦工房跡が存在する可能性は高いと考える。とすれば、第7トレンチ、あるいは平成4年度調査でも確認しているように、本地点で瓦がみつかっていることも裏づけられよう。

2. 瓦の系譜と同范関係について

本項では、本遺跡から見つかった瓦のうち、軒丸瓦・軒平瓦の瓦当文様を取り上げ、瓦の系譜と同范関係について述べておきたい。

上総国分寺両寺で、これまでに確認している瓦の系譜は、単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦については、平城京6225型式、均整唐草文軒平瓦については、平城京6691型式という瓦の系譜が考えられている^(注1)。また重郭文軒平瓦については、平城京6572型式、本遺跡では見つかっていない有芯三重圓文軒丸瓦については、平城京6012型式を引くと考えられている^(注2)。

本遺跡から見つかった軒丸瓦・軒平瓦が、上総国分両寺への供給をしていたと考えた場合、これらの瓦の系譜から、本遺跡での瓦生産操業開始の年代をおさえられないだろうか。とくに平城京6225型式については、近年の平城京の成果では、若干年代が下がっている^(注3)。あくまでも系譜ということといえば、川焼瓦窯跡をはじめとして、瓦生産に関する操業の時期を絶対年代でどの年代におけるのか。また本遺跡での瓦生産の契機が、上総国分寺造営にかかわるとすれば、その年代はいったいいつなのか。上総国分寺創建の年代ともあわせ、詳細な検討が必要であろう。

また、本遺跡で見つかった軒平瓦のうち、第16図8については、菊間廃寺跡と同范ではないかとの教示を得た。平成4年度確認調査時に見つかった同型式の軒平瓦にも、その可能性のあるものがあるとのこと^(注4)。菊間廃寺跡については、村田川水系で本遺跡と同水系である。本遺跡の場合、瓦の供給に、村田川を利用した水運を行っていることが想定できる。とすれば、同水系上の菊間廃寺跡に、本遺跡の瓦の一部を供給している可能性もある。

3. 供給先への問題提起

川焼瓦窯跡で生産した瓦は、一部を除き上総国分両寺（国分僧寺・国分尼寺）の創建期で使用した瓦であることが、今回の調査であらためて明らかになった。

そこで、ここでは、主体的な供給先である上総国分両寺へ、本遺跡で生産した瓦（とくに平瓦・丸瓦）の量比をもとに、上総国分両寺の建物構造についての問題提起をおこないたい。

前提とするのは、あくまで今回の調査で、本遺跡から見つかった瓦のうち、丸瓦と平瓦の総量比較である。ただし、平成4年度調査で見つかった瓦についても、丸瓦と平瓦の量比について、圧倒的に平瓦の量が多いことを確認した。平成4年度調査は、遺跡範囲を確認するために実施した調査である。遺跡のほぼ全域に、長いトレンチを設定し、調査を行った。見つかった瓦の総量は、今回の調査で見つかった瓦の総量とほぼ同量である。

第IV章で述べたとおり、本遺跡で見つかった瓦のうち、丸瓦と平瓦の総量を重量比で比較してみると、平瓦と丸瓦で1:0.09しかなく、10%にも満たない。この事実をどのようにとらえるか。可能性を以下に羅列する。①本遺跡のまったく異なる地点で丸瓦を生産している。②本

遺跡では丸瓦の受注が少なく、他の瓦窯跡で、丸瓦を特異的に多く生産している瓦窯が存在する。③丸瓦は廃棄分が少なく、多くが製品として供給先へ運ばれていた。④本遺跡の瓦生産が、供給先の建物の屋根構造に見合う生産であった。

いずれの可能性が高いであろうか。①は、可能性がきわめて低い（平成4年度調査成果により）。②も、現段階で判明している上総国分寺関連の瓦窯跡で、この事実はない。③は、一つの瓦窯では、丸瓦や平瓦を同時に焼成しているため、可能性は低い。

可能性が高いとすれば、④であろうか。製品としての熨斗瓦の点数が多いこと。丸瓦は少ないが、軒丸瓦の点数は多いこと。また丸瓦の種類は、ほとんどが玉縁丸瓦であること。本遺跡でのこれらの事実は、④の可能性を高めていく材料にはならないだろうか。

なお、建物の屋根構造で、総瓦葺きの建物を想定する場合、三重県ヒタキ廃寺の例によると、平瓦と丸瓦との量比は、枚数比で1:0.8、重量比で1:0.6である^(註5)。ヒタキ廃寺は、総柱建物周辺に、瓦の堆積層があり、倒壊した総瓦葺き建物であろうと考えられている。

註1 ① 関口広次 「上総・下総国分寺出土古瓦の系譜と伝播」 『史館』創刊号 1973

② 三舟隆之 「国分寺造営と地方豪族—国分寺系軒瓦の分布を中心としてー」 『駿台史學』第75号 1989

註2 千葉県文化財センター 「歴史時代(1)」 『房総考古学ライブラリー7』 1993

註3 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告XIII』 1991

註4 宮本敬一氏のご教示による

註5 三重県埋蔵文化財センター 「ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか」 『三重県埋蔵文化財調査報告99-2』 1992

4. おわりに

今回実施した川焼瓦窯跡の調査は、限定された期間での調査・整理作業であった。しかし、調査の目的として掲げた項目に対しては、その成果は大きなものがあったと考える。窯構造については、有牀（ロストル）式平窯であることが判明したばかりでなく、煙道を奥壁外側に取りつけ、きわめて整った作りをしたものであることも判明した。

見つかった瓦は、上総国分寺の創建期に使用した瓦であること。丸瓦と平瓦の量比で、生産遺跡側から、供給先の建物構造に対する問題提起ができるのかということ。

今回、時間的な制約から、さらに細かな分析を試みることはできない。特に平瓦・丸瓦に対しては、多面的な数量処理を行い、生じたデータのクロスチェックをする必要がある。機会を見つけて取り組むこととし、今後の課題としたい。

本遺跡の周辺では、北側台地上で大規模な宅地開発が、現在も進行中である。村田川の河川改修なども実施され、本遺跡周辺の環境は急激に変化している。ただし、本遺跡は、宅地造成地内の縁辺に設けられた緑地帯として、保存されることが決まっている。今後は、調査成果を生かし、本遺跡の保護と活用が具体化していくことを、待ち望むところである。

写 真 図 版



川焼瓦窯跡の航空写真（平成 4 年撮影）
撮影：アジア航測株式会社

図版 1



1. 遠景（南東から）



2. 第1トレンチ遺構検出状況
(南から)



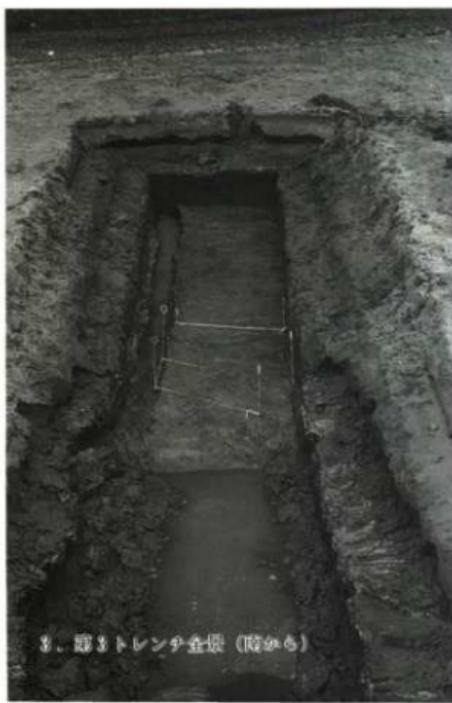
3. 第4トレンチ全景（西から）



2. 駿河トレンチ発掘（唐から）



3. 駿河トレンチ発掘（駿から）



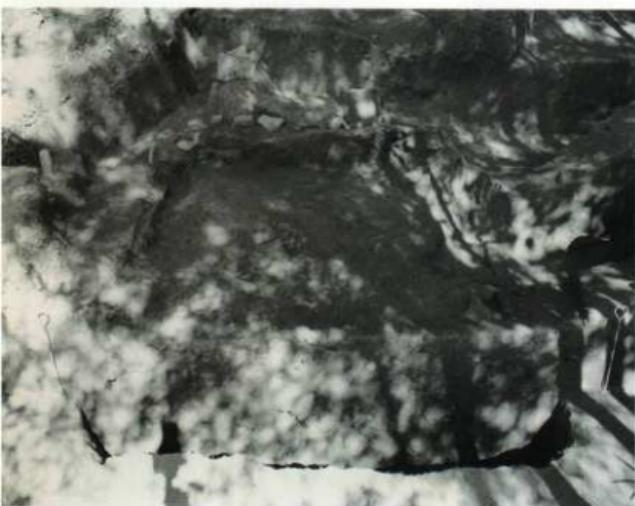
4. 駿河トレンチ発掘（駿から）



5. 駿河トレンチ発掘（駿から）



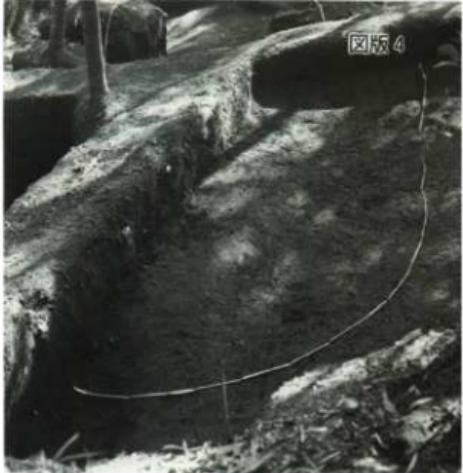
1. 第5トレンチ全景（北から）



2. 1号窯全景（南から）



3. 1号窯の灰原作業場全景
(北西から)



1. 3号窯全景（北から）



2. 3号窯（入口）
遺物出土状況（南から）



3. 第5トレンチ（1区）
3号窯遺物出土状況（北から）



1. 第5トレンチ（1区）
3号窯遺物出土状況（北から）



2. 第5トレンチ企設（東から）



3. 第5トレンチ企設（東から）



1. 第10図-1



2. 第10図-2



3. 第11図-3



4. 第11図-4



5. 第12図-5



6. 第12図-6



1. 第13図-7



2. 第13図-8



3. 第13図-9



4. 第14図-10



5. 第14図-11



6. 第15図-12



1. 第15図-13



2. 第15図-14



3. 第16図-1



第16図-2

4.



第16図-5



第16図-4



5. 第16図-3

6.

7. 第17図-10



8. 第16図-8



9. 第17図-9

図版9

熨斗瓦（凸面）



1. 第24図-3



2. 第24図-1



3. 第25図-8



4. 第24図-2



5. 第25図-7



6. 第25図-10

熨斗瓦（凹面）



1. 第24図-3



2. 第24図-1



3. 第25図-8



4. 第24図-2



5. 第25図-7



6. 第25図-10

隅切り瓦（凸面）



1. 第23図-1



2. 第23図-2



3. 第23図-3





1. 軒丸瓦の瓦当裏面



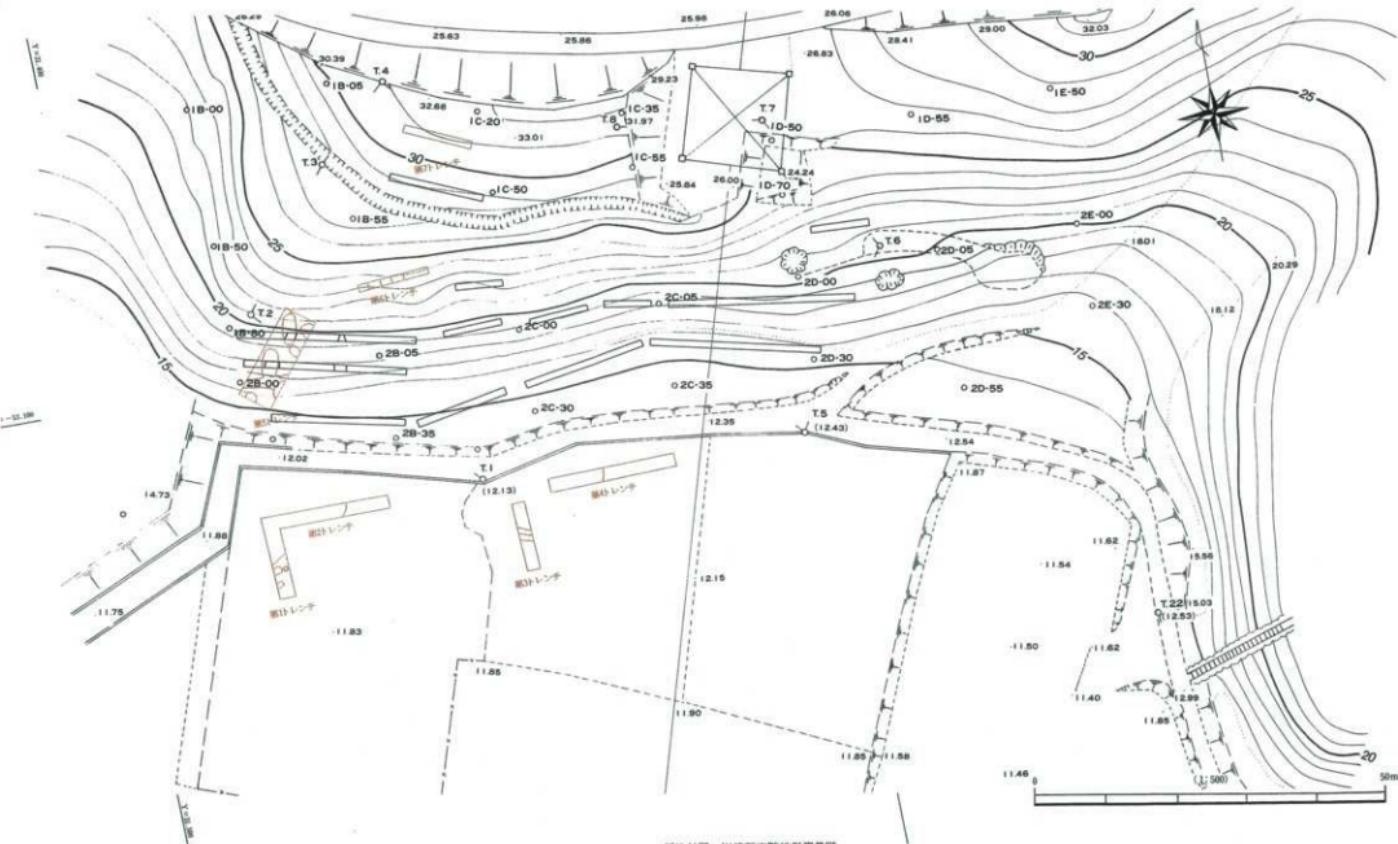
2. 石塼大字



3. 平瓦を転用した焼台（牀台）



4. 平瓦の大きさ



折込付圖 川越瓦窯跡地形測量圖

抄 錄

ふりがな	いちはらしかわやきがようせきはくつちょうきほうこくしょ
書名	市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第257集
編著者名	田形孝一
編集機関	財團法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡 809番地2 TEL 043-422-8811
発行年月日	1994年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川焼瓦窯跡	千葉県市原市草刈字川焼1,648-1他	12219	025	35度 31分 20秒	140度 10分 55秒	1993.10. 01~1993. 10.29	200m ²	国庫補助事業 による学術調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
川焼瓦窯跡	生産	奈良時代	瓦窯跡 灰原 作業場 瓦溜め 瓦集積場	5基 3か所 2か所 3か所 1か所	瓦 <ul style="list-style-type: none"> ・単弁二十四葉蓮華文軒丸瓦 ・均整唐草文軒平瓦 ・重郭文軒平瓦 ・平瓦 ・丸瓦 ・櫛斗瓦 ・隅切り平瓦 ・隅落し平瓦 	窯の1基は有牀（ロストル）式平窯。

千葉県文化財センター調査報告第257集
市原市川焼瓦窯跡発掘調査報告書

平成6年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2号
印 刷 株式会社 弘 文 社

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです